

---

# 金の悪魔と金の天使

活字中毒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金の悪魔と金の天使

### 【Nコード】

N3309V

### 【作者名】

活字中毒

### 【あらすじ】

双子の妹と一緒に死んだら、よくわからないけど双子の妹と一緒にゲームの世界に転生していて、なんか気付いたらチートで腹黒な男の娘になっていたという話。今のところ週1で更新予定です。

LV・000 『神よ、二人を頼みます』

うるさいな。

周りが騒がしい。僕は目を開けようとしたが、開かなかった。手足も思うように動かない。まるで全身麻酔を打ったようだ。打った事ないから想像だけだ。

「頑張つてね、あとちょっとだからね。かわいい私の子供達」

優しい声がして、体が少し窮屈になる。

私の子供達？という事は、転生したんだろうか。

身動きすると、温かいキスが降ってきた。

「雨水<sup>りゅうすい</sup>。いい子だから泣かないでね」

どうやら僕は雨水というらしい。よくわからないが、母親らしき女の人の言う通り大人しくする事にした。

「立夏<sup>りつか</sup>。目を覚まさないでね」

もう一人は立夏、か。おそらく妹だろう。なんとなくわかる。

「雨水、妹を、立夏を守ってあげて。ああ、見えてきた」

今度も兄妹か。ややこしくなくていい。

「水月様、こちらに」

テノールの男の音がする。母親はカサカサと音を立て、僕らをまた強く抱いた。

「いたぞ！こつちだ！」

「さ、お早く」

男が落ち着いて、安心させるように言う。母親が頷くのが気配でわかった。

「神よ、二人を頼みます」

震える声でかすかに呟き、僕らは硬いものの上に置かれた。気のせいでなければ、水が流れるような音がする。

「願わくは、また会えますように。しっかりと、たくましく生きて頂戴ね」

その声を最後に、僕の意識は途絶えた。

『……って感じだった』

僕は覚えている事を目覚めた妹

立夏に教えた。

『そっか。優しそうなお母さんだね』

『うん』

何があったのかはわからないが、会いに行けたらと思う。

僕らは双子だ。そして、どういいうわけか前世の記憶がある。

前世でも双子だった僕らは、全く似ていない容姿だった。どちらも十人並みだが僕はつり目で立夏はたれ目、天然の立夏と面倒臭がちな僕。身長差は三十くらいあったんじゃないかな。男女だから当然なんだけど。

僕らには前世の記憶があるが、人格などが同じというわけではないらしい。まだ生まれてすぐなのに人格があるのは変な感じがする。

それから、今話しているのは前世で言うところの念話っぽい。立夏限定なのか、他の人もできるのかは全くわからないけれど。

『でもここ、どこだろうね』

何かに乗せられて川を下ったのは確かだ。流れは結構速くて、途中でひっくり返ったりしなかったのが奇跡だと思う。滝がなかったのは幸いだ。

『川の下流……としかわからないな。目も開かないし、音だけじゃわからない』

どこかに引っかかって止まったようだ。目も開かないって事は本当に生まれてすぐなんだろう。そんな子供を捨てる　いや、逃がすなんて、余程の事があるに違いない。

その後は赤ん坊の体が僕らの思考に耐えられなかったのか、意識はプツツリ途切れてしまった。

『おや、妖精の子供ではないか』

しわがれた老人の声がして、僕は目が覚めた。

『上から流されて来たのか？……む、これは』

老人が僕の服をつかんだ。服ではなく、ただの布かもしれないけど。

『雨水に立夏、か……訳ありのようじゃな』

どうやら名前が書いてあったらしい。

『ユーラン、いるか』

『はい、レソト様。どうかしましたか』

『この赤子を育ててやる事はできるか？』

『見たところ妖精のようですし、できなくはないでしょうが……おや、人間の血も混ざっているようですな』

妖精？まさかここは地球ではないのだろうか。では、なぜ言葉がわかるのだろうか。

『ハーフですか……妖精と人間の特徴をどのように受け継いでいるかによりますね。ですがまあ、何とかしてみせましょう』

色々疑問は尽きないが、また眠気が襲ってきた。

面倒くさいな、この体！





Lv・001『この世界って、“アルヴェディア”だよ』

僕らは三歳になった。僕らを拾ってくれたレソトとユーランは精霊らしく、世の中の事は然程詳しくはなかったが、大体の事はわかった。

まず、生まれたばかりの僕や立夏に自我があった理由。それは妖精の血を引いているかららしい。

そもそも、妖精と精霊は一つの種族だった。それが長い時を経て分かれ、人間などに近い方を妖精、昔のままなのを精霊と呼ぶようになったそうだ。

だから、妖精は人間や他の種族（竜人、魔族、翼族）よりは精霊に近い。例えば、植物の声が聞こえたりとか。動物に好かれやすかったりとか。目に見えないはずの精霊が見えたりとか。ちなみに精霊に関しては、力の強い精霊は意識すれば見えるようにできるらしい。

そして、精霊は親というものがない。自然のもの　例えば道端に落ちている小さな石ころなんかに宿る。いつの間にか生まれていて、姿も一生変わらない。宿っているものが死ねば　石なら砕ければ　精霊も死ぬ。

妖精は普通に両親から生まれるが、精霊のように自我は初めからある。そのため体に負担がかかり、子供の内はほとんど寝て過ごす

のだとか。かくいう僕も、一日の三分の二は眠っている。十歳くらいになれば半分になるそうだ。

僕と立夏の念話は原因不明のままだ。精霊の話し方は頭に直接響くから、同じようなものだろう。僕らの場合はお互い限定だけど、ちよっとした先祖返りかもしれない。

そういえば、僕と立夏は生まれたばかりだったけど、食べ物はどうしたと思う？これも妖精の特徴に救われたんだ。

妖精や精霊は人間のように野菜とか肉を食べない。食べれるけど、食べても意味がないらしい。ではどうやって生きるのかというと、魔力を食べる。食べる、というよりは吸収する、という方が正しいかもしれない。

人間は生きるのに水と食糧、そして酸素を主に使うけど、僕らは魔力を使う。歩くのも、泳ぐのも、羽を使って飛ぶのも魔力を消費する。激しい動きであればあるほど。だから妖精は魔力無しでは生きられず、五つの種族の中で最も魔力が多い。妖精が魔術を得意とするのは、僕らにとって手足を動かすのと同じくらい魔術を使うという行為が自然な事だからだ。だって、同じように魔力を使うでしょう？ちなみに、精霊は宿っているものの魔力が具現化したようなものなので、魔力を食べる必要はないが引かれるらしい。

魔力を吸収する方法は三つある。一つ目は自然のものから吸収する方法。自然のものが発する魔力は純粹ですごくきれいだ。二つ目

は道具から吸収する方法。魔道具なんかは魔力がない人でも使えるように魔力を込めてあるから、いざという時は妖精の食糧となる。三つ目は他人からもらう方法。魔力がある人なら触れるだけで吸収できる。が、個人の持つ魔力は自然のように純粹ではないため相性があるとか。

幸いにも、レソト達が住んでいるリーントアの森は聖域だった。聖域とは、魔力の多い土地の事だ。あまりに濃すぎて、中心部は妖精と精霊しか入れないほどである。魔力は余るほどあった。

僕らはハーフだから魔力を吸収しないという可能性もあったんだけど、試してみたところどちらでもいけるようだ。精霊では母乳は出ないから、無理だったら人間をさらって来るところだったと笑われ、顔がひきつったのはいい思い出だ。

「雨水、気になったんだけど」

母親が使ったのと同じ言語で立夏が言った。レソトは昔妖精のふ

りをして旅をしていた事があり、その時に覚えたそう。三百年前だが、まだ通じるようで良かった。

「何？」

「この世界って、“アルヴェディア”だよな」

“アルヴェディア”っていうのは、前世で夢中になっていたVR MMORPGの事だ。

「やっぱりそう思う？」

僕も前々からもしや、と思っていた。レソトの話は地名から何から、“アルヴェディア”にそっくりだったのだ。尤も、そっくりだというだけでやはりゲームとは違うのだが。

「オリアン帝国があって、魔王と冒険者達が戦ったってアレ、“アルヴェディア”の話でしょう？HPやMPを回復する薬はさすがにもうないみたいだけど」

まあ、ファンタジーとはいえ現実あったら怖い。……いや、もしかしたら作れるかもしれないが。昔はあったのだし、三百年前の道具は高値で取引されているという話だ。

妖精の特徴についても、概ねゲームの通りだった。なら、MPは魔力と考えていいだろう。

「立夏、魔術とか覚えてる？」

「バッチリ」

「僕もだよ」

ゲーム時代は“金の悪魔”“金の天使”と呼ばれた僕達だ。容姿は若干変わっているけど、金髪は健在である。

魔術に関して右に出る者はいないと言われた実力、現実のアルヴエディアでも試してみよう。

LV・002『そっやって考えたら、妖精ってすごく強いよね』(前書き)

ある程度進んだら登場人物や設定も書こうと思います。

Lv・002『そうやって考えたら、妖精ってすごく強いよね』

さて、魔術を修得し直すに当たって、僕はレソトに魔術について聞いてみた。ゲームとは色々違うだろうしね。

レソトは妖精の子供は思考が大人と同じだったりするから、すんなりと話してくれた。

『まずは魔術の種類じゃが、黒魔術、白魔術、精霊魔術、召喚魔術、錬金術の五つがある』

これはゲームと同じだ。“アルヴェディア”では魔術を使う。魔法は魔物が使うものなので別なのだ。

『雨水と立夏は妖精の血が入っているから。魔術はどれも問題なく使えるじゃろう。特に精霊魔術と召喚魔術は得意中の得意じゃな』

精霊魔術は精霊と、召喚魔術は聖獣や神獣と契約して力を貸してもらおう魔術だ。対価として、魔力を渡す。

間違っってはならないのが“貸してもらおう”という点で、使役するなどと言う者は成功しない。妖精に適性が高く、その他の種族に低いのはその辺りの意識の違いだろう。

『黒魔術は魔族、白魔術は翼族、錬金術は人間が得意じゃが、妖精と大して変わらんよ』

そう。妖精は魔術に関してかなりチートなのだ。魔術攻撃力、魔術防御力共にかなり高い。その代わり物理攻撃力と物理防御力が翼族の次に低く、レベルアップに他の種族の五倍ほどかかったりする。

MP＝HPで、MPが減るとHPも減るくせに（逆もしかり）HP回復薬が全く効かないのもネックだ。MP回復アイテムはなかなか手に入らないし、高価である。MPを他人に渡すような物好きがいるはずもなく、自然のものから吸収するなんて設定はなかった。だから、初めに妖精にしていた者も他の種族に変えていったのだ。

一部を除いて。

「竜人はどうなの？」

ある程度答えは予想しているが、立夏が聞いた。

「竜人は魔力を上手く使えないのじゃ。魔力があっても魔術は使えない」

やはりそうか。

しかし、竜人は物理攻撃力、物理防御力がダントツでトップである。ゲーム時代の僕や立夏が同じレベルの竜人の攻撃を食らえば、一発で死ぬだろう。

「魔術は基本呪文を詠唱するが、錬金術だけは別じゃ。錬金術は主に日常生活の中で活用する術で、薬品の調合や鍛冶、魔道具の作成



などに使用する。それから詠唱カットや無詠唱もあるのじゃが、妖精でもかなり難しいの』

詠唱カットと無詠唱はなかった。時間短縮になるし、できたら面白いかもしれない。

『あと、三百年前の魔術は古代魔術と呼ばれておる』

「古代魔術？」

『うむ。昔の魔術は今よりも威力が高かったからの。忘れられた魔術はほとんどがそういうものじゃ』

ゲームでいうところの上級魔術だろうか。確かに、現実で使えば街どころか国が半壊しかねないと思う。滅多な事で使うのは良くないかもな。ゲームみたいに味方を避けたりしてくれないだろうし。

「じゃあ妖精は魔術しかできないの？」

『そんな事はありませんよ』

横で聞いていたユーランが言った。

『確かに妖精は魔術が得意で肉体戦は苦手ですが、そんなものは本人の努力次第でどうにでもなるでしょう』

つまり、魔法じゃないけど魔法剣士みたいなのも夢じゃないと。

『まあ、竜人のようになるのは無理ですが。弓やナイフ、あとは刀や鎌なんかは使えるんじゃないですかね』

「戦闘に使う鎌って大きくない？」

妖精に重いものを振り回す力があるとは思えないんだけど。

『大きいですが、あれは遠心力を利用して振り回すんです。力はあまり関係ありません』

なるほど。立夏は弓で決定かな。前世で弓道やってたし、東洋の弓とは違うだろうけど素人よりはマシだ。

『そうそう。魔術師でしたら、杖を使った棒術を習っておくのも良いのでは？』

ああ、そういうのもあるのか。二人に聞いて良かった。

ゲームの世界では装備品が限られたり、一定以上能力値が上がらなかつたりしたけど、ここでは何とかなりそうだ。妖精の弱点もある程度カバーできるに違いない……これってチートじゃ？

「そうやって考えたら、妖精ってすごく強いよね」

同じ事を考えたらしい立夏が言った。

『そうですね。特にあなた方は両親の能力を良いとこ取りした存在ですから』

食べ物的事とかね。飢える事はまずないと思う。

『ただ、妖精は数が少ないですよ。妖精狩りがありますから』

「妖精狩り？」

『妖精の羽は綺麗でしょう？羽だけじゃなく、容姿も端麗ですし。高く売れるんですよ』

うわぁ。何て恐ろしい。

『捕縛の方法なんていくらでもあります。魔術を使えなくする魔道具とかね』

だから体術もきちんとやりましょうね、と言うユーランに、僕らは真っ青になって頷いた。

『Lv・003』良い面と悪い面は背中合わせなんだね』

そんなこんなで魔術と体術の訓練を受けました。

といっても、体術は基礎の基礎だけ。体作りって感じかな。まだ三歳だし、普通の妖精は勉強なんだから。でも、レソトやユーランが教えられる事は少ない。数百年森から出てないしね。昔のレソトのように旅をしている妖精か精霊が通りかかったら教えてもらう事にした。

聖域の中心部って安全なんだけど、その周りには強い魔物ゲームで言うところのモンスターがうじゃうじゃいるらしい。なのである程度戦えるようになるまで出られない。実戦経験をつむにはもってこいだけだね。

つまり、ここに来るとしたらかなり強い人になる。聖域は妖精や精霊にとって安らぎの場所だから、それなりに出入りはあるらしいし、今から楽しみだ。

五歳になりました。

魔術は面白いぐらいにどんどん吸収したよ。元々知っていたつてもあるんだけど、やっぱり妖精はチートだ。ゲームとは比べ物にならない。限界がないからね。自惚れじゃなく、そこらの宮廷魔術師より強いんじゃないかな。実戦経験もあるし。

もちろん、五歳でもう実戦をしたわけじゃないよ。ゲームでの話

たかがゲームだって侮っちゃあいけない。“アルヴェディア”はよりリアルにするために、“現実度”っていうものがある。

現実度は五段階。一は痛みはないし、見た目怪我もしない。どころか、服が汚れたりしわになったりもしないのだ。逆に、五は現実そのもの。怪我したら痛いし、装備品はボロボロになるし、殺したモンスターが消えるなんて事はない。討伐を証明する部位も自分にとるのだ。一のように落ちていたりしない。

何より、“アルヴェディア”には盗賊などもいた。生々しい肉の感触は、日本人にとって衝撃だっただろう。当然五は危険だという事で、経営側が許可した者しか選択できないようになっていた。

僕は発売当日から参加している古参のプレイヤーで、妖精を使い続けた変わり者だった。あちらこちらでコネを作り、コツコツとレベル上げをした結果が魔術チート。古参だから珍しいアイテムもたくさん持っているし、滅多な事では死なない。現実度は四で、華々しく活躍した。

転生する二年前だろうか。現実度を五にする許可が出て、僕は

いつものようにプレイした。弱いモンスターから慣らすように狩ったけど、吐き気や罪悪感は半端ない。ましてや、ノンプレイヤーとはいえ人間を殺した時は……。

人間とは慣れる生き物で、半年もすれば平気になった。PKとかもあつたけど、吐かなくなった。現実度を下げなかったのは意地なのかもしれない。

勘違いしないで欲しいのは、決して殺しを何とも思わないわけではないという事。できるなら殺さないし、殺しても相手に対する礼節を忘れなかった。“アルヴェディア”をゲームではなく、もう一つの現実として扱った。

それが、僕らなりの覚悟だった。

体術に関しては、まだまだ基礎だけ。一通りの型は習ったけどね。こっちは全くの初心者だから。

それに、僕らはまだ一日の三分の二を寝て過ごさなければならぬ。大人になっても他の種族よりたくさん寝るっていうし、そこは人間に似てほしかったな。

でも、そうすると自我ができるのは大分遅いから、魔術や体術の訓練はできなかつた。良い面と悪い面は背中合わせなんだね。

魔術を教えてくれたのはレソト、体術はユーランだ。護身術程度

ですけどね、なんて言ってたけど、どう見ても護身術の域を超えている。相手の力を利用するものらしいから、僕らでも十分使えるんだ。せっかくだからユーランと同じくらいにはなりたいと思う。男としてはね。

それから、もうちょっとしたら他の精霊にも訓練をつけてもらおうって事になっている。それぞれの得意分野で。

僕らはレソトとユーラン以外の精霊に会った事がないから、他にもこの森にいるって事に驚いた。なんでも、近づかないように言っていたらしい。小さい内は見境なく食べるかもしれないから。精霊って魔力の塊だし。

まあ、僕らの場合、魔力じゃないと生きていけないってわけじゃないから、魔力を吸収する本能みたいなのは弱いらしい。ひどい人は二割くらい減っただけでおなかですくんだって。僕らはわからないけど、八割も減れば間違いなくおなかですくだろうって話だ。

あ、二人以外の精霊を見ないって言っても、実体を持たない低位精霊は別だ。彼らは小さな光の玉に見えてすごく綺麗だ。自我はあるけど、話せない。残念。

Lv・004『それで、どうしようか。アレ』

「おお、何と素晴らしい魔力！このニニアスの木から発せられる魔力の純粹さは私が見た中でも最高だ！ぜひとも研究を……」

どうしよう。何か変な人がいる。

『あの人頭おかしいよ、雨水』

立夏が念話で伝えて来た。この子、思った事を率直に言うから天然の毒舌なんだよ。本人気付いてないけど、結構グサツてくる事をさらっと言っし。

『立夏、ああいう人と関わっちゃダメだよ』

何かすごく疲れそうな感じがする。無視するのが一番だ。

リーンテアの森の中心部に来たんだから相当な使い手なんだろうけど、あんな人は嫌だ。何と言うか、魔力馬鹿？僕ら妖精には魔力が見えるから妖精か精霊かはすぐわかるんだけど、確認するまでもない。妖精だ。

『あの人羽、透明だね』

立夏が言った。

そう、彼は羽を出していたのである。妖精は羽を狙われるし、羽自体あんまり丈夫じゃないからしまっておくのが普通なのに。



『聖域の中心部だし、たまには羽を伸ばしたいんじゃない？』

『あ、すごい。虹色にも見える。シャボン玉みたい』

立夏は身を乗り出すようにして見入った。

ちなみに、僕は濡羽色、立夏は乳白色をしている。レソト達曰く珍しい色で、妖精狩りの人達に見つかったら全力で逃げないとヤバイらしい。

というか、もしかして透明も相当珍しいんじゃない？

僕らは数分前まで、ニニアスの木にもたれかかって昼寝をしていた。

ニニアスの木っていうのは御神木みたいなもので、大量の魔力を発している。地面とか他の木からも出てるんだけど、全く比べ物にならない。ニニアスの木があるからここは聖域なんだ。

精霊は自然のものに宿るけど、レソトはニニアスの木に宿る皇位精霊だ。皇位つてのは精霊の力の強さを表す位みたいなので、上から皇位、高位、中位、低位になる。つまり、一番強いのだ。そして、ユーランは高位精霊である。宿っているものはマニの木、だったかな。

おおっと、話がずれた。閑話休題。

そしたら、反対側にあの男が来た。見た目は二十代くらいだけど、妖精は長寿らしいから当てにはならない。髪は紺色で、ストレート。背中の中頃まである。目は残念ながら見る事ができないが、相当整った容姿のようだ。

妖精が容姿端麗な種族だって本当だったんだね。っていうか、こういう転生パターンでは見る人皆美形つてのが王道な気がするんだけど。あ、でもレソトはおじいちゃんだし、ユーランは十人な……殺気を感じるからやめておこう。

『それで、どうしようか。アレ』

運の悪い事に、レソトもユーランもこの場にいない。寝てたからどこに行っているのかわからないけど、いないものは仕方ないな。

『あの羽は興味あるけど、放っておくのが一番なんじゃあ……？』

『でも、数日居座りそうだよな』

数日どころか数ヶ月とか普通にいそうだ。妖精は聖域では食べ物に困らないし。聞いた話では、聖域に住んでいる人達もいるらしい。三百年前だけだ。

『変な人には捕まりたくないな……うわっ』

目の前に金色の目があつて飛び上がりそうになった。うわ、金の目とかファンタジーだなあ。

僕らは魔術師だし、体術とかに関しては修行中だから気配には疎い。でも、それにしたって普通の人よりはわかるはずんだけど、全くしなかったよ。この人。

「おや？こんなところに子供がいる。この辺りに町や村があるって話は聞いた事がないんだが」

そりゃあ、町や村に住んでるわけじゃないしね。

「それにしても、見事な金髪。新緑色の瞳も、翼族のように真っ白な肌も素晴らしいじゃないか。見た感じまだ五歳前後かな？かわいらしい姉妹だな！」

「僕は男なんだけどねえ……」

笑顔で、少々低めの声を出して言った。ユーランにもかわいい、かわいって言われるけど、男としてはうれしくないんだよ。確かに僕の容姿は天使だけどさ！

あ、言うておくけどナルシストじゃないからね。僕と立夏は髪の長さ以外本当にそっくりだから、僕の容姿をけなすと立夏の容姿もなす事になる。それが嫌なだけだ。

だからといって、女の子みたいな扱いをされるのは非常に不本意なんだ。あくまでも僕は男だし。

「男の娘！美少女兄妹！さわっていいか！？」

男が鼻息荒く、手をワキワキさせながら近寄って来た。

うん、なんか色々残念だな。この人。せつかく整った容姿なのに、宝の持ち腐れってやつだ。……いや、これで美形じゃなかったら本当にただの変態か。

『うわぁ……………』

立夏が本気で引いている。優しい子だから、こんな事滅多にしないのに。よっぽど怖かったんだな。よし。

【駆け抜ける風よ、我に従え                      セルーション】

男には空を舞ってもらおう事にした。

LV・005『ラ・バト、さん?』

変人はラバトという名前らしい。名乗ってきたから、仕方なく名乗り返した。

僕はラバトを中心部の外へ放り出したのに、無傷で帰って来た。こんなんでも強いみたいだ。一人で中心部に来るだけの事はある。

「それで、お前達はなぜこんなところにいるんだ?」

「んゝまあ、ちょっと訳アリだね。ここの精霊に育ててもらったんだよ」

自我があるから手はそれほどかからなかったと思うけど。

「精霊に?それはめずらしいな。妖精の子供は精霊にとって危険なんだが」

食べるからね。

「む?.....ああ、ハーフなのか。ならそういう欲求が弱いか異常に強いかのどちらかだな。お前らは弱かったというわけか」

強い場合もあるんだ。人間の血が混ざったせいで妖精としての能力を制御できないとか?とことんついてるんだなあ。僕らって。

「精霊に育てられた金髪幼女の双子.....」

「ラ・バ・ト、さん？」

「はいいいっ！」

なんかこの人、普通にしていたらモテるだろうになあ。時々脱線してしまふみたいだ。それ以外はまともなのに。

「魔術も精霊に？」

にやけてた顔を元に戻し、ラバトが言う。

「うん。一般常識とかはあんまりわからないみたいだったからね。その代わりちよっと早いけどって」

「ちよつとどころじゃないけどな。普通は十歳過ぎてから習い始めるぞ」

へえ、そうなんだ。

「じゃあ、十歳まですごく危険なんじゃないの？」

立夏が尋ねる。主に狩人とか狩人とか狩人とか。

「ああ。確かに、子供が一番狙われやすいな。でも、体ができてないから十歳前に魔術を使える奴は少ない。練習しても意味がないな」

やっぱりチートだな。この体。うん。

「それでねー、私達、この世界の事全く知らないんだ。教えてくれると助かるんだけど」

この人に頼むのか、立夏。まあ、暴走しなければいい人みたいだけど。僕を女の子扱いしたり、男の娘って言ったりするのはいたさないな。

一般常識って知ってて当たり前だから、ラバトは何から話していかかわからないようだった。それなら、と僕らが質問すると、淀みなく答える。きつと頭が良いんだろう。

この世界はアルヴェディアっていう名前らしい。ゲームのまままだ精霊はその辺り全く気にしてなかったから、知らなかったんだよね。

大陸に国は五つ。北のカンド王国、西のフレッシュア王国、南のインニス王国、東のユリール王国、中央のエフェソス王国。三百年前にあったオリアン帝国が分裂したようだ。リーンテアの森はフレッシュア王国の東寄りの場所にある。

それから、ずっと気になっていた名前の事も聞いてみた。僕の名前って明らかに日本っぽいよね。レソトとかはカタカナなのに。

すると、僕らのような名前は珍しくないという答えが返ってきた。昔からいるにはいたが小数で、三百年前に増えたとか。

……もしかして、もしかしなくてもプレイヤーだよな。ほら、カタカナ使う人とそうじゃない人がいるし。

あと、アルヴェディアの名前は貴族や商人の場合、『名前・家名』になるようだ。平民の場合は『名前・住んでいる土地名』で、王家は『名前・王族でない方の親の家名・国名』となる。両方の親が王家の場合『名前・嫁（婿養子）に来た方の国名・国名』になるのかな。

「じゃあ私はどうなるの？」

「本名は別にあるだろうが、名乗るなら『リツカ・リーントア』になるな」

そうそう。漢字の名前は正しく発音できる人とできない人がいるらしい。名前が漢字の人は大抵ご先祖様が漢字だったとかで、普通に発音できる。が、カタカナの人はできない人が多い。その“ご先祖様”がプレイヤーなのかそうでないのかも確かめたいところだ。

地理の話に戻るけど、リーントアの森から一番近いのはルルスっていう村だ。森を出てから歩いて十日ぐらい。まあ、魔物の多い領域の近くに住もうとする人なんて妖精くらいのもものだからね。

ルルス村は南側にあるけど、北に十三日歩いたところにはトリアナという町がある。そんなに大きくはないが、活気のある町らしい。西側のマッシュューブへは二十日歩かなければならず、馬か何かがあった方がいいとの事。とても大きな街だそうだ。

東側には何もなし。騎馬民族や遊牧民なんかが行ったり来たりして、エフェソス王国との国境には小さな山がある。山と山の間を川が通っており、リーントアの森の川とつながっているらしいが、



僕らがエフェソス王国出身だと断言はできなさそうだ。この川はた  
くさんの川の水が集まっていて、リーンテアの森の北側にもつなが  
っている川がいくつかある。つまり、フレシア王国出身という可能  
性もあるわけだ。

いずれ生き別れた母親を探す時は、フレシア王国とエフェソス王  
国を中心に探す事になるのかな。

LV・006 『俺ら妖精は数が少ない』

アルヴェディアには五つの種族が存在する。国も五つあるけど、一つの種族に一つの国というわけではない。人間があまりに多すぎるからだ。大陸の人口の約六割から七割が人間らしい。王家も、北のカンルド王国以外全て人間だとか。

だからといって、人間ばかりが偉そうにふんぞり返っているわけでもない。一部の頭の残念な貴族はそうかもしれないが、平民達はフレンドリーだし、人間でない種族には冒険者が多いから商人も友好的だ。冒険者は命のやりとりをする分収入が良いからね。商人にとっては大切な客なのだ。

頭の出来が良い上の連中は、人間以外の種族に反乱でも起こされたらまずいとわかってるので、きちんと人権を認めている。何て言ったらって、一番弱いのは人間なんだから。数は圧倒的に多いが、そのせいで他の種族のような同族意識がなく、まとまらない。欲が深いから保身に走る。魔道具を作るのは一番上手いが、たとえ勝てたとしてもかなりの痛手になる事は必須だ。

そういうわけで、一部の馬鹿と闇商人以外は差別や人身売買なんてしない。何せ、どの国でも法律で禁止されているからね。妖精狩りなんてのも違法なんだよ。なくならないけど。

さて、それぞれの種族の特徴だけど、人間は大体地球と同じ。違うのは目がチカチカするぐらい髪や目の色がカラフルな事。あとは、

背が高いらしい。成人した男の平均身長が百八十後半。女は百七十の中頃だ。寿命は八十くらい。魔術があるからかな。

竜人は基本人間と同じ姿。でも、竜の姿にもなれる。モンスター  
のドラゴンと違って魔法は使えないけど、身体能力が半端なく高い。  
たぶん建物なんて拳一つで壊せるんじゃないかな。生まれてから何  
よりも先に力の加減の仕方を習うそうだ。それから魔術が使えなく  
ても、ブレスは使えるようだ。ただし、人型の時は威力が弱まる。  
竜体の時の大きさとモテるモテないが決まるとか。戦う時にしつぽ  
だけ出す時もあるが、邪魔になるので基本はしまっている。髪の色  
は必ず原色で、鱗の色と同じだ。瞳は金。それ以外はないらしい。  
竜人の男は基本がっちりした体つきで、身長は百九十から二百三十  
くらい。女はスタイルの良い人が多くて、身長は百八十から二百く  
らい。

魔族は背中にコウモリのような羽がある種族だ。色は黒、紫、赤  
などがある。どれも暗い色だ。羽は飛ぶ時以外しまっておくのが普  
通である。肌は浅黒く、耳は尖っている。髪の色は白っぽいものが  
多く、瞳は赤、紫、金など。黒魔術が得意で魔術攻撃力もあるが、  
妖精ほどではない。物理攻撃力も竜人の次に強いとか。人間よりや  
や小柄。

翼族は鳥のような羽を持つ種族で、色は白系の薄い色だ。魔族と  
同じように、基本はしまっている。真珠のように白い肌に、やはり  
尖った耳。髪は金髪や薄いピンク、水色など。瞳は大抵が青、緑、  
橙。妖精ほどではないが白魔術に秀で、回復や補助の魔術が得意。  
魔術防御力は非常に強いが攻撃力が皆無。完全に後方支援系。攻撃  
の術は持たないが、鉄壁の防御を誇る。身長は魔族と同じかそれよ  
り小柄。

妖精は前にも聞いた通り、魔術に特化した種族だ。ゆえに、弱点は竜人。逆もまた然りである。耳が尖っていて、髪や瞳は何色でもありうる。僕らは肌も白いから、妖精か精霊でないと翼族と間違えるだろうとの事。

妖精の弱点はもう一つあって、それは羽であった。ゲームの設定ではなかった事だけど、妖精は自己回復力がすごい。小さな切り傷ぐらいだと一秒も経たずに治ってしまう。それは吸収した魔力を羽に溜め込んでいるからで、その魔力を使って体が勝手に治している。だから魔力は消費されてしまっただけ。

妖精は魔力を体と羽に分けて保存している。普段使うのは体の方だし、こっちが減ると羽の方がいっぱいでもおなかが減る。羽の魔力は自分が怪我をした時や、緊急用だ。そのため、羽がなくなれば自己治癒もなく、魔力は半分になってしまう。魔力の減った量とは即ちおなかのすいた量で、魔力が底をつきると餓死してしまうのだ。妖精は生きるだけで魔力を消費するため、羽のない妖精は死亡率が格段に上がる。妖精の数が減った最大の理由であった。

「最近は何を食したまま捉える場合が多いがな」

「どうして？」

「体と羽を離すと、魔力が少しずつ抜けていくんだ。そのせいで、羽はだんだんくすんでいく。それなら見目麗しい妖精を鑑賞用として飼っておく方がいいだろう？」

立夏がぶるつと震えた。

おそらくそうなった場合、妖精は自由を失うだろう。魔力は与えられないし、生きてゆくのに不自由はないだろうが、心が死んでしまいうそだ。

「今もそういう子がいるの？」

「ああ。大抵が有力貴族だから、助けようなんて奴はいないだろうしな。俺ら妖精は数が少ない」

今は散らばっている同族を見つけるのも難しいのだそう。

「もし助けるって話が出たら、お前らも手伝ってくれ」

そう言うラバトの目は、別人かと思うほど真剣だった。

『Lv・007』ずっとやっててつかなくなったら回むよ

妖精って色々複雑な立場にいるみたいだ。強いのに、いや、強いからこそ狙われる。美しく強い妖精を自分のペットのように扱って、さぞかし気分がいい事だろう。

それから、レソトとユーランが帰って来る前にラバトは出て行った。何か用事があったらしく、ここに寄ったのはついだったようだ。ニアスの木を見て名残惜しそうにしていたから、また来るだろう。その時に視線を感じたのは気のせいに違いない。

まさか、シヨタではないよね。“幼女”って言ってたし。……それはそれで嫌だけど。

初めてラバトが来た日から三年が経った。その間、ラバトは何度か来ている。ユーランと意気投合したようで、時々ユーランの言動

が怪しくなるのは勘弁してほしい。

八歳になった僕らだけど、二年前から少しずつ訓練を強化している。立夏は弓術と棒術、僕は鎌を使った戦闘法と暗器の扱いについてだ。立夏にはフィジー、僕にはサモアとナウルが指導してくれている。

フィジーは見た目十五歳くらいで、おっとりした少女だ。立夏とは友達みたいな関係だが、訓練は結構厳しいらしい。サモアは無口な青年で、あまりしゃべらないものの教え方が物凄く上手い。ナウルの方はおしゃべりで胡散臭い感じだ。聞くと、二人は腐れ縁らしい。三人共高位精霊である。

訓練は地味でしんどいだけだから割愛しよう。ナウルが暗器の扱いだけでなく暗殺術まで仕込んできたのは余談である。

『おー、大分体力ついてきたな』

「ずっとやっててつかなくなったら凹むよ」

僕は投げたナイフを回収しながら言った。

今、僕は中心部の外に出て実戦訓練中である。せっかく強い魔物がいるのだから、と一年くらい前から始めている。サモアとナウルがいるし、いざとなったら魔術もあるから危険はない。

初めの内は、鎌を振り回せる場所に魔物を誘導して森の中を走り回ったり、錯乱しつつナイフを投げたりするので体力がもたなかつ

た。それなりに鍛えていたんだけど、やっぱり実戦は違う。それに、魔術の時とは異なる肉を切る感触が何とも言えない気分させた。

僕が鎌と暗器、立夏が弓と棒術を習っているのには、きちんとした理由がある。

まず、これから先立夏と旅するのならどちらかが前衛をしなければならぬ。仲間ができるかもしれないが、“かもしれない”を当てにするのは最良とは言えないのだ。だから僕が鎌、立夏が棒術を習った。

妖精が扱える前衛の武器は鎌、棒、刀、片手剣……あとは使い方によってはナイフくらいだろう。刀にも魅力を感じたが、鎌の方が相手との距離を保つ事ができるし、魔術と組み合わせやすいのではないかと思った。詠唱カットはできるようになったしね。

立夏の方は、魔術の補助に杖を使う事を想定した上での選択だろう。杖を持っていると、勝手に接近戦が苦手だと勘違いしてくれるという利点もあるとか。

弓は立夏が弓道をやっていたからだけど、暗器は鎌とは反対に障害物の多い場所でも戦えるように選んだ。鎌で戦えなくなった場合も、一見何も持っていないように見えると油断するしね。

暗殺術に関してはナウルがやった方がいいって言った。何でも、才能があるらしい。素早さはあるし、この年にしては小柄だし（これからどうなるかはわからないけど）、何より性格が。



失礼だと思わない？見た目に反して真つ白な性格じゃないのは自覚してるけどさ。ああ、この外見もいいんだって。相手が侮るから大きくなったら男らしくなるかもしれないのにねえ？

……嘘だよ。希望を込めて言ってみただけ。仮に女っぽくなくなつたとしても、強そうには見えないんだろうな。それに妖精って成長止まるし。個人差があるけど、できるだけ遅くがいいな。最低立夏と同じか年上が……兄としてそれぐらいは望んでもいいよね。

そういえば、僕の容姿についてちゃんと説明した事はなかったよね。鏡がないから僕自身ちゃんと見た事がないんだけど、男女の双子なのに立夏と瓜二つらしい。

立夏はふわふわした金髪に新緑のくりくりした瞳をしている。まつ毛がすごく長くて、顔が小さい。翼族でもないのに肌は透き通るように白く、きめ細やかだ。まだ子供なのに手足がスラツとしていて、綺麗というよりは可愛い系。僕と同じくこの年にしては小柄な方だ。

というか、髪の毛の長さ以外身長も同じなのだから、正直複雑だった。立夏は腰辺りまで伸ばしていて、大抵邪魔だからとポニーテールにしている。僕は肩より少し長いくらいで、下の方で一つにまとめていた。

もつね、これでも結構鍛えているわけなんだよ。なのに見た目に全く変化がないってどういう事だろう。

いや、この顔でミスチヨになっても困るけど。

LV・008 『立夏がカレー作るって』

『雨水、聞こえる？』

立夏の声が頭に響く。

『どうしたの？何か用？』

僕は仕留めた鳥型の魔物の血抜きをしながら返した。真っ青な羽に黄色とオレンジのまざった尾を持つ、鷲サイズの鳥だ。名はユークエンという。アルヴェディアでは魔物も食料らしく、ラバトの話では普通に食べるとか。そもそも、魔物が強すぎて野生の動物は全滅。家畜ぐらいしか残っていない。

『あのね、カレーのルーみたいな味がする木の実を見つけたんだけど、今日カレーとかどうかな？』

『丁度いい。ユークエンを仕留めたから、チキンカレーにしない？』

『いいね、それ！じゃあ、準備しとくね』

魔物という生き物において、“大きい＝強い”という方程式は成り立たない。強い魔物ほど魔法を操るからだ。この魔法というものは魔術とは全く違う。まず、当然の事ながら詠唱の必要がない。魔法陣も必要ない。その魔物の“意思”一つで簡単に発動してしまう。それが魔法だ。ある意味、妖精や精霊の魔術は魔法に近い。

魔物が使う魔法は、一匹につき一属性だけである。例えばユークエンのような鳥型の魔物は風系が多い。たった一属性ではあるが、ランクの高い魔物の魔法は侮れない。ドラゴンなどであれば、国一つ滅びかねないほどの威力を誇るのだ。

ランクは下からE、D、C、B、A、S、SSとなる。ちなみに古代種のドラゴンはSSでユークエンはAだ。基本的に魔物は、体の色が派手なほど強い。もちろん例外はあるが、そう考えてまず間違いないだろう。

『どっかしたのか？』

「ん〜？立夏がカレー作るって」

『かれー？何だそれ』

「辛くておいしい食べ物」

前世の話はしていないので、詳しくは話せない。

『食べ物か？前の“さんどいっち”も旨かったよな！』

森の中では作れる料理などしているが、ラバトが時々持って来てくれるパンなどの食材はありがたく使わせてもらっている。いくら食べる必要がなくても、前世の記憶がある僕らとしては物足りない感じがするのだ。精霊達も食べられないというわけではないため、一週間に三日ほどは作るようになっていた。

「ナウルは食べるの好きだね」

『いや、オレが好きなのは食べることじゃなくリツカが作っ……………』

「食<sup>…</sup>べるのが好きなんだよね？」

『……はい。そうですね』

ナウルのテンションが一気に下がった気がするけど気にしない。

「サモアも食べるよね？」

『俺は別に……………』

「立夏が作ってくれるんだから、食べるよね？」

『……………わかった』

え、黒いって？何の冗談かな？

ユークエンは意外とおいしい。色が色だから最初は食べる気しなかったんだけどね。そのおいしさとランクがAって事から高級食材なんだって。

「んっまゝい！」

「立夏、確かにおいしいけどスプーンを振り回すのはダメだよ」

器は木をくりぬいたものだが、スプーンは金属製だ。砂鉄が手に入ったから、コツコツ集めて錬金した。普通の鉄がないのは森だから仕方がない。

『これがカレーか！？すつげーいい匂いするじゃないか。……野菜は余計だが』

「残しちゃダメだよ？」

『わ、わかってる！リツカが作ったものを残すものか』

『しかし、本当においしいですね。辛さを控えれば子供でも食べられそうなの……』

「あ、わかる？年齢に関係なく人気のある食べ物なんだよ」

『ふむ、確かに食べやすいな』

森から一步も出た事がないはずの僕らがなぜこんな料理を知っているのかとか、疑問はあるだろうに聞いてこない彼らにはすごく感謝している。

『ウスイヤリツカが作ったご飯はおいしいわよね』

「本当？フィジーありがとう！」

僕は微笑ましげにしつつ、ほわわんとしたフィジーが弓の名手で棒術までマスターしているなんて外見だけでは想像できないな、と思っていた。

「サモアは？おいしいでしょ」

『ああ』

『旨いぞ！いくらでも食べられそうだ』

「ナウルには聞いてないけどね」

『ウスイがいじめる……』

「ええ〜？いじめたつもりはないんだけどなあ。サモアは聞かなくて言わないけど、ナウルはうるさいくらいにしゃべるでしょ？」

『う、うるさくて悪かったな！』

ナウルがわめいているが、事実なのだから仕方がない。放っておけば空気になりかねないサモアにしゃべらせるのは大切だ。存在感がないってわけじゃあないんだけどね。

『大体ウスイは……』

「はいはい、しゃべってばかりいないでちゃんと食べてね」

絶妙なタイミングで立夏が言い、僕は内心でにやりと笑う。さすが僕の妹。わかってる！

LV・008 『立夏がカレー作るって』（後書き）

10/13 ナウルのセリフで、「立夏」「雨水」をカタカナに直  
しました。



Lv・009 『成人っていつなの？』

時は流れて、僕らは十二歳になった。十歳を超えたわけだけど、僕らの睡眠時間は半日以上だ。どうやら、前世の記憶がある事が原因らしい。

その日、久しぶりにラバトが来ていた。ここ数年は遠くを旅していたらしく、会う事はなかったのだ。妖精は滅多にいないらしいし、いてもわざわざ危険を冒してまで旅をする人なんてなかなかいない。精霊も、基本的には宿っているものの側から動かないそうだ。

「元気にしてたか？相変わらずかわいいな！」

「うるさいよ、ラバト」

僕は眉間にしわを寄せる。

「かわいいものをかわいいと言って何が悪い。美しいものやかわいいものは正義だ」

誰か、このわけのわからないオッサン（おじいさんかもしれな  
が）をなんとかしてほしい。何年経っても女顔で立夏にそっくりな  
僕のコンプレックスを的確に刺激してくれるKYを。

「そうだ、美しいもので思い出した。お前達に土産があるんだ」

そう言って取り出したのは一本のビンだった。前世で言うビールビンより少し薄い茶色に、ピンク色のラベルが貼ってある。

「それ、お酒？」

立夏が目を輝かせて身を乗り出す。未成年で死んだため、前世でも現世でもお酒を飲んだ事はない。僕らの両親はそういう所、厳しい人だったし。

「ああ。シユカという木の実から作られている」

「……そのどこが美しいものなの？」

「シユカの花は素晴らしいぞ。真っ白な中でほんのりピンクにも見える花弁。香りもまた最高で……」

「はいはい、わかったから」

聞いておいて何だが、つまらない話を永遠と聞けるほどお人好しじゃない。

「でも、お酒飲んでいいの？まだ成人してないんじゃない？……あれ、成人っていつなの？」

立夏が首を傾げる。かわいい。かわいいが、あまり人前でそういう仕草をしてほしくないな。ラバトもしっかり見て頼めるめてるし。頭をはたいてやる。

「った！……ええと、人間なら十六からが成人だな。妖精は体の成長が止まったらだ。まあ、酒を飲む年齢は定められていないから、ぶっちゃんけ生まれたてでもかまわん」

いや、それは絶対不味いけどね。その赤ちゃんの健康のために！

「そういえば、妖精の成長が止まるのってどのくらい？」

「十代後半から二十代が多いが、人それぞれだからな。もっと遅い人もたくさんいる」

個人的な希望としては二十代中頃で止まってほしいものだ。さすがにそれぐらいになれば男らしくなっているだろう。

「じゃあ成人を目安にここを出たらいいかな」

「それが妥当だろうね」

僕達としては、生き別れた母親を探したい。別れた時の様子も気になるし、前世では母親というものに縁がなかったから会ってみたいのだ。

「母親を探すのなら、レソト川を遡るのがいいのだろうか……レソト川はクレメ川やルーセア川やフレス川やら、色々集まってできた川だからな。探すのは一苦労だぞ」

ラバトが言った。十歳の時に精霊達とラバトには前世の事も母親の事も話してある。

ちなみに、レソトの名前はレソト川から取ったものらしい。

「わかってるよ。それに厄介そうだしね」

川に捨てられた時の状況を思い出して言った。どう考えてもただの貧乏な一般庶民ではないだろう。追手とか、部下か臣下らしき人物とか。

「このまま生きるっていう手もあるんだけどね。まあ、必死に探さんじゃなく、のんびり旅しつつ見つかったらラッキーみたいな感じ  
で」

「そうそう。一応目的がないと面白くないし？お母さんの顔を見た  
いってという気持ちもあるけど、どうしてもっていうわけじゃないか  
ら」

僕達の一番大きな目的は前世のゲームで培った力がこの世界でどれだけ通用するかを確かめる事だ。皆の話からするとゲームの時代から三百年経っているようだが、妖精のように長寿な種族もいる。知り合いがいたら面白いのになあ、とも考えていた。

転生云々はともかく、ゲームの話は誰にもしていない。この世界にゲーム（遊びという意味のそれではなく）はないから、説明するのが面倒だったのだ。だから、こちらの目的は僕と立夏だけの秘密である。

「まあ、話を聞いた感じでは貴族か有力商人ってところだろうな」

ラバトの言葉に、僕は深く頷いた。もし母親に会ったら面倒事に

なる、というフラグの匂いがぶんぶんするのだ。だから会いたいという気持ちと会いたくないという気持ちがあるわけで。

ま、運が良ければ会えるでしょう、と深く考えない事にした。

LV・009 『成人っていつなの？』（後書き）

セリフだけだと雨水と立夏の見分けがつかない感じがしてきた今日この頃です。

一人称以外話し方は同じですし。

外見も性格も似ている設定なので。

LV・010『今すぐ私と契約なさい』（前書き）

書き忘れていましたが、『』は精霊やドラゴンのセリフ、または念話です。

LV・010『今すぐ私と契約なさい』

僕と立夏は十二歳になって、以前とは比べ物にならないほど強く成長した。外見は相変わらずだけど……まあ、それは置いておくとしよう。

リインタアの森にいる魔物は単独で倒せるから、割と自由に出入りしている。

と言っても、森の外に出るわけではない。出たところで何も無いのはわかっているから、世間で大人と認められるまではここにいるつもりだ。いくら強くても子供の二人旅は危険だろうし。

毎日訓練は欠かしていないけど、最近は魔物も襲って来ないからつまらない。むしろ食料として欲しい時に追いかけないといけなくて大変だ。

『雨水〜ヒマ〜』

立夏の声が飛んでくる。学ぶ事は全て学び終わったし、既にサモア達より強いからする事がないのだ。

『そう言ってもねえ』

別のところを散歩しているため見えないだろうが、僕は苦笑した。

何か面白い事はないかな、と空を見上げた時、僕はそれを見た。



念話を使う事も忘れ、思考が真っ白になる。

「なっ、あれは」

ドラゴン。

そう、ドラゴンだ。

片方はきれいな紫のドラゴンだった。太陽の光を反射してキラキラと輝く。もう片方は真っ黒で、魔力が淀んでいるように見える。

二頭のドラゴンは戦っているようだ。紫は雷、黒は水の魔法やブレスで攻撃を繰り返している。魔力量から言えば黒の方が圧倒的に多い。

「あっ」

『雨水？どうかした？』

立夏の声に答える間もなく黒のドラゴンの攻撃が紫のドラゴンに当たり、僕のすぐ側に落ちる。

『何！？今の音！』

離れた場所でも聞こえたのか、立夏が声を上げる。

『ちよつと、雨水！？』

『……大丈夫、僕は何ともないよ』

上の空で答える。

目の前のドラゴンは美しかった。そんな陳腐な言葉では表現しきれないほどに。そして、想像以上に大きかった。普通の一軒家（もちろん前世基準）より一回り小さいくらいだろうか。人間一人どころか、十人くらい軽く乗れそうだ。

ドラゴンが頭を振り、体を起こした。僕と目が合う。

『妖精……そうか、聖域でしたか』

納得するように目を細める。やはり妖精は聖域にいるというイメージなのだろうか。

『きましたよ。下がってなさい』

言葉と同時に強風が襲う。僕はとつさに魔術で風を逃がした。ドラゴンの翼によるものなので、防御魔術ではなく風魔術だ。

『ウルファ、いい加減にしなさい。貴方が暴れたってあの人は帰って来ません！』

紫のドラゴンが言うが、黒いドラゴンには聞こえていないようだ。何も言わず、襲いかかってくる。

『くっ、やはりダメですか……その妖精』

突然呼ばれて、僕は目を瞬いた。

「僕？」

『そうです。今すぐ私と契約なさい』

「は？契約？」

このドラゴンは前世で言う西洋のドラゴンのような外見といい、飛ぶ事といい、先程から連発しているブレスや魔法の威力といい、どう考えても古代種である。

ドラゴンには地竜、翼竜、古代竜があり、地竜は飛ぶ事ができない。翼竜はもつと小柄で、人三人を乗せるのがやっとだそうだ。古代竜は大きくて強く、滅多に見ない種族だとラバトから聞いている。

ドラゴンは神獣なので契約はできる。しかし、召喚術の契約は聖獣や神獣を縛るものなので、好き好んで契約する獣はいないはず。

『詳しくは後で説明します。このままではあいつに勝てません。契約する必要があるのです』

そう、契約による獣達の利点は一つ。普段抑制されている力を発揮できる事だ。術者の許可さえあれば、本来の力を解放して戦える。

事情はよくわからないが、僕は頷いた。ドラゴン、しかも古代竜と契約するような機会なんて一生に一度もないだろうし、必死なのが伝わって来る。

「わかった」

【我、雨水・リインタアは問う。汝、我の許可なく力を使用しない事を誓うか？】

【我、クロード・ア・オセク・レイクレスは雨水・リーンテアの許  
可なく力を使用しない事を誓う】

【汝、我の友となる事を誓うか？】

【我、友となり僕となる事を誓う】

【以上の誓約を以て、召喚の契約と為す】

魔力の糸が僕とクロードの体に巻き付いた。クロードに見えてい  
るのかはわからないが、薄く発光しているそれは聖域の魔力のよう  
に美しい。

契約している間も攻撃を防ぎ続けていたクロードはもうボロボロ  
である。が、僕が見上げた瞬間小さく目を見張ったように見えた。

『ウルファ、貴方を放置しておくわけにはいきません。これで終わ  
りです！』

クロードが言うと同時に、辺りを閃光が包んだ

。

LV・010『今すぐ私と契約なさい』（後書き）

クロードの名前を少し変更しました。

LV・011『一途で馬鹿で不器用な友人でした』

『どうか、安らかに眠ってください。ウルファ

』

鱗の色が黒から青に変わったドラゴンを前に、クロードは黙祷するよつに目を伏せた。ドラゴンの体は残る事なく、少しずつ姿を消してゆく。それがクロードの魔法である事は、すぐにわかった。

『さて、まずはお礼を申し上げます。雨水様』

「そうは言っても、僕は何もしてないし。それに仮契約だしね」

僕は苦笑して答える。

『そう、それです。頼んだ者として失礼かもしれませんが、なぜ本名をおっしゃってくださらなかったのですか？』

契約は本来、本名でなければならぬ。本名を名乗らなかった場

合は仮契約となり、契約よりも聖獣や神獣の力は弱くなってしまふ。しかし誓約による縛りは強く、契約と同等かそれ以上である。

クロードが目を見張ったのは本名でない事に気付いたからだろう。それはすなわち対等に扱っていないという事で、僕がクロードを侮辱したも同然の行為なので何を言われても仕方がない。でも。

「雨水というのは本名だよ。リーンテアは仮名。捨て子だから名前がわからないんだよね」

僕や立夏は本名がわからない。だから、仮契約しかできないのだ。母親を探したい理由はこれもあった。

『そう、でしたか。すみません』

「別にかまわないよ。知らなかったんだし」

僕が本名を言わなかった事に違いはない。

『それにしても、誓約はあれだけで良かったのですか？』

「僕は友達を縛りたくはないからね。それとも、絶対服従とか言うてほしかった？」

『いいえ。ただ、変わった人だなあ、と』

立夏でも同じようにしたと思うんだけど。どこぞの欲深い人とか比べてほしくはないな。仕方なくそうする事があるかもしれないけど、基本的に同意なしでは成り立たないのが契約だから無理強いはしたくない。

あ、だからこそ変わった人だって言ったのか。クロードに断るといふ選択肢はなかったようだし。

「でもまあ、クロードも十分変わってると思うよ。自分から主従の契約をするなんて」

最後の“僕となる事を誓う”ってところだ。僕は“友となる事を誓うか”って言ったのに。

『貴方なら、と思ったんですよ。直感みたいなものです』

あー、それは裏切られたと思っただろうね。本名じゃなかったわけだし。不可抗力とはいえ、悪かったなあ。

でも、主従の契約って結局絶対服従に近いんだよね。そこまで強くないけど。僕が魔力込めて放った命令には絶対に逆らえないし。何でわざわざそんな事をしたんだろう？ドラゴンはMなのか？

とりあえず立夏に連絡して、中心部へ帰る事にした。詳しくは後で話すと言ったら、立夏は若干不機嫌になりながらも了承してくれた。

クロードはドラゴンのままだと邪魔なので、人型になった。これは古代竜特有の魔法で、地竜や翼竜には使えないのだそう。紫の髪に銀の瞳の中性的な美形で、本人曰く「せつかく妖精になるのですから、きれいな容姿の方がいいでしょう」だそうだ。これはあくまで仮の姿で、変えようと思ったらどんな姿にでもなれるとか。種族



も自由自在。ただし、実際にいる人物にはなれない。

「さっきのドラゴン何だったの？ 様子が変だったけど……」

言いたくない事かもしれないが、後で説明すると言われていたの  
で聞いてみた。

「……あれは邪竜ですよ」

「邪竜？」

「ドラゴンは確かに強いですが、精神面は脆いんです。特に怒りや  
悲しみの感情が強くなると暴走して、自分でも止められなくなりま  
す。それが邪竜。鱗は黒くなり、魔力が淀み、力が普段の数倍にま  
で跳ね上がる」

そういえば、前世の本にもドラゴンは精神面が弱いとあったよう  
な気がする。まさか本当とは。

「ウルファは、愛する者を人間に殺されました。そのショックで邪  
竜になり、暴れていたんです。そのままでは国の一つや二つ、軽く  
滅ぼしてしまうので私が後始末を」

「人間に……」

「雨水様が人間の血を引いているからってどうこう言うつもりはな  
いですよ。私が認めた人ですから。でも、人間は嫌いです。あの人  
が殺されたのだから、ちゃんとした理由があるわけではなく欲望か  
らだった……」

きつときちんとした理由があったって、ウルファというドラゴンは邪竜になっただろう。でも……。

「友達、だったんだね」

「ええ。想いが通じない事もわかっていたのに、ただあの人だけを想っていた一途で馬鹿で不器用な友人でした」

クロードの心が泣いているような気がして見上げ、僕の身長では届かないから頭でなく背中をポンポンと叩いた。

LV・012 『僕達の第二の家族だから』 (前書き)

あと少しでリーントアの森編が終わります。

LV・012 『僕達の第二の家族だから』

「へえ、ドラゴン？初めて見た！」

立夏は興奮した様子で目をキラキラと輝かせた。

「ね、ドラゴンの姿も見てみたいんだけど！」

「私がかまいませんが……」

クロードがこちらを見たので、僕は頷いた。立夏のためなのだから当然だ。

「では」

僕らから少し距離を置いた場所に立つと、クロードはドラゴンの姿になった。葡萄色の鱗は、いつ見ても美しい。

「うわぁ……ラバトが喜びそうだね」

いや、ドラゴンを初めて見た感想がそれなのか。まあ、僕も思ったけど。

「本当にゲームとかのドラゴンみたいな姿なんだね。面白いなあ」

「違っかったらそれはそれでビックリだけどね」

僕らの仮説ではゲームの“アルヴェディア”にそっくりな世界の三百年後なんだから。

「触ってもいい？」

『触るぐらいなら……でも、乗らないでくださいね。契約者以外は乗せたくないのです』

「それって、ドラゴンは皆そうなの？」

立夏がツルツルした鱗を恐る恐る触っているのを横目で見ながら、僕はクロードに尋ねた。

『契約済みのドラゴンはそうですね。それ以前は性格にもよります。私の場合は必要でない限り無闇矢鱈と触ってほしくないのですが、立夏さんは雨水様のご兄妹ですから、特別です』

「それなら雨水に感謝しないとねー。ドラゴンに触るとか貴重すぎる体験だよ」

満足したのか、僕の隣に戻って来ながら立夏が言った。クロードは人型に戻り、やわらかい笑みを浮かべる。

「私は雨水様に出会えて幸運でした。古代竜は契約しても力を制限されてしまったり、そもそも契約自体できない場合も多いと聞きますから」

「って事は、大体の力は出せてるの？」

「はい。八割ほどでしょうか。私達古代竜は天界では全力を出せるのですが、地上では半分も出せないようです。おそらく、きちんと契約すればほぼ百パーセント出しきれるのではないのでしょうか」

「うわあ、雨水すごいんだね」

「立夏さんも雨水様ほどではありませんが、召喚魔術師の素質があるようですよ。妖精だからではなく、個人として」

「わかるの？」

「はい。なんとなくですが。立夏さんの場合、どちらかというところ霊魔術の方が相性が良いのではないのでしょうか」

「精霊魔術かー。誰か契約してくれないかな？あ、でも仮契約はすごく失礼なんだっけ」

そう。僕はクロードの方から頼まれたんだし、その場の成り行きで契約してしたから仕方なかった。でも、こちらから持ちかけておいて仮契約しかできません、なんて「ふざけるな！」と言われても文句は言えない。それくらい、契約は重要なのだ。

ちなみに、世間一般では幻獣　魔獣や聖獣、神獣の総称　や精霊との契約は一匹までとなっている。ゲームではそんな事なかったけれども、ここではそうだ。

だけど、多分まだまだいけるよ。何とというか、感覚としか言えないんだけどわかる。古代竜だから半分近く埋まっちゃったけど、逆に言えば半分ある。

……やっぱりチートじゃない？

きつと立夏も同じような感じだろう。旅をする時は気を付けないと大変な事になりそうだ。

「相手が事情を理解して仮契約でもいいと言えば大丈夫です」

「なるほど。初めから言っておくわけね」

「というか、それならここの精霊に頼めばいいんじゃない？」

「あ、そっか」

立夏は思いつかなかったようで、マンガのようにポンと手を打った。それがおかしくて少し笑ってしまう。

「確かにレソトは皇位精霊だし、ユーランも高位精霊だよね。フィジー達は知らないけど、たぶん高位でしょ」

「そうでなければあの知性や強さの説明がつかないからね」

わかりきっている事なのでわざわざ聞きはしなかったが。

「でもねえ、あんまり契約したくないんだよね。レソト達とは」

「なぜですか？その者達なら事情も知っているのでしょ？」

「そうなんだけど、やっぱり仮契約は申し訳ないっていうか……これは他の精霊でも同じなんだけどね。あと、あの人達なら契約しなくても困っていたら飛んで来てくれそうだなあっていう妙な安心感

もあるんだよ」

「あー、わかるかも、それ」

僕も頷いた。なんだかんだ言っつて、過保護なところがあるからね。まだ森の魔物を上手く倒せなかった時、スパルタながらもついつい手を出してしまっていたのを知っている。本人達はこっそりやっているつもりだったみたいだけど。

「信頼されているんですね」

「信頼……うん、そうだね。僕達の第二の家族だから」

僕が言つと、立夏は同意するように頷いた。



『Lv・013』神竜とは、アルヴェディアの神そのものです』

長い付き合いになりそうだから、クロードにも僕らの事情について話す事にした。説明が面倒だったけど、ゲームの話まで詳しく。するとクロードは、少し考えてから口を開いた。

「雨水様と立夏さんは神竜をご存知ですか？」

「神竜？さあ？」

「まあ、そうでしょうね。地上の生き物の大半は忘れているようですよ。幻獣なら誰もが知っていますよ」

神竜、ねえ。ドラゴン的一种だろうという事はわかるが、そんな種類は聞いた事がない。

「神竜とは、アルヴェディアの神そのものです。その名の通りドラゴンの姿をしています」

「アルヴェディアの神？」

そんな話をするという事は、僕らが転生した原因を知っているのだろうか。そう尋ねると、クロードは頷いた。

「彼は金竜神と呼ばれている金のドラゴンです。神竜や古代竜は契約者などの決まった相手以外に名前を教える事はありませんので、私もきちんとは知りませんが」

「え、じゃあクロードの名前も教えない方がいいよね。人前ではどうするの?」

「知られるのはかまわないですよ。別段何かがあるわけではありませぬし。ただ、気に入った相手以外に呼ばれると我慢しがたい嫌悪感に襲われるので、命が惜しければ軽々しく呼ばない事をおすすめします。もちろん、雨水様と立夏さんはかまいませんよ」

名前を呼んだだけで死ぬ可能性がある?!?

「それで金竜神ですが、今から千年ほど前に三人の人物を貴殿方の世界から転生させました。ある事故で亡くなった人間です。あの方の気まぐれはいつもの事なので私達は気にも止めませんでした」

どんな神様なんだ。

「山下翔やましたかけるという方は魔術の才能、超人的な記憶力、そして仲が良く温かい家庭ふじさきりなに生まれる事を望んでアルヴェディアへ転生しました。藤崎莉那という方はドラゴンとしての生を望み、二柱目の神竜とのおのがすひこに生まれ変わって銀竜姫と呼ばれています。そして、遠野和彦という方は生き返る事を望みました」

「そんな事できるの?」

立夏が眉を寄せて聞いた。確かに、神様でも生き返らせる事はできないとか、事情があつて無理とかいうパターンはよくある。

「はい。できます。当然の事ながら、簡単に使ってはならない力ですが」

そりゃあ、そうだろうね。

「ですから、金竜神は条件を出しました。今のままの姿でアルヴェディアへ行き、当時問題になっていた魔力枯渴を阻止する事を。金竜神は原因を知っていましたし、解決策も考えてはありましたがそれをテストにしたのです」

「魔力枯渴？もしかして英雄カズヒコ・トーノーって」

「遠野和彦さんでしょうね」

「通りで変な名前だと思った」

アルヴェディアの者なら誰でも知っている物語だ。日本っぽい名前がつけられるようになった最初の原因でもある。転生者かもなー、とは思っていたけど、裏側にそんな事があったとは。

「彼は問題の解決を見事に成し遂げ、地球で生き返りました。もちろん時間は巻き戻して。それから、向こうでアルヴェディアをモデルにしたゲームを作ったようです。金竜神が楽しみに語っています。だから、よく覚えていきます」

「ふえっ？“アルヴェディア”を作ったTONOって“遠野”だったんだ。ずっと“殿”だと思ってたよ」

わからなくもないけど、何で会社名に“殿”なんだよ。……：そういえば前世は天然だったな。ちなみに僕は気に止めてもいなかったみたい。

「ええ、雨水様と立夏さんがおっしゃったゲームでしょうね。そし

て、今から三百年前にゲームと同じような出来事がアルヴェディアを襲った。その時に金竜神は“ゲームの世界に行きたい”と思っ  
ている方をこちらの世界に呼んだのです。問題がないように、亡くな  
った方限定で」

「その人達はどうなったの？」

「三百年前、アルヴェディアにゲームのキャラクターの姿で転生し  
ました。魔王戦で活躍した者、平和に暮らした者など様々です。今  
も何人かは生きていますよ。雨水様と立夏さんの場合、“ゲ  
ームの世界に行きたい”ではなく“ゲームの世界のように魔術が使  
えたらなあ”とか“ゲームの世界には行きたいけど戦争のない世界  
がいいなあ”という風に思ったのではないですか？」

心当たりはある。何せ現実度を五にしていたから、戦争なんてい  
うものが心底嫌だったのだ。必要があれば殺すし、ゲームの世界へ  
の憧れもあったけど。

という事は、立夏とまた双子なのも前世の考えが関係しているの  
かもしれない。仲はかなり良かったし。

「転生がそんな理由だったとはねー。まあ、もう死んでるんだから  
どうでもいいけど」

「私達みたいな人が他にもいるかもね。雨水、探してみようよ」

「うん、面白そうだね」

旅の目的が一つ増えたな。



LV・014 『何かパートナーみたいでいいよね』(前書き)

気付いたらお気に入り登録件数が100を超えていました。

ありがとうございます！

LV・014 『何かパートナーみたいでいいよね』

僕らが転生した理由を知ったところで何かが変わるわけではないが、まあ疑問が解けて良かったと思う。ずっともやもやしているのも嫌だしね。機会なんて絶対ないと思うけど、神竜と会えたら面白いのにな。

……なんて事を考えながら立夏が入れてくれたお茶を飲んでいたら、サモア達がぶらりと遊びに来た。前に普段何をやっているか気になって尋ねたところ、大抵は森をぶらぶらするか宿っているものの中で眠っているそうだ。さっきの騒ぎで来なかったところを見ると、今日は後者だったらしい。

『うおっ！？何か変なのがいるぞ』

ナウルがクロードを見て大げさにのけぞった。フィジーは小さく首を傾げ、サモアは不思議そうな顔をしただけである。サモアの場合、わかる人にしかわからない微妙な変化だったが。

『おい、誰かつつこめよ。無視か？無視なのか？』

いつも通り騒がしいのは放っておくとして。

「サモア、フィジー、古代竜のクロードだよ。クロード、こっちは僕と立夏に戦う術を覚えてくれた精霊のサモアとフィジー」

「紫竜王と呼ばれています。事情があつて雨水様と契約しました」

クロードがにこやかに言った。頭を下げたりしない辺り、文化の違いなのか古代竜として当然の事なのか。

『まあ、そうですね。ウスイをよろしくお願いしますね』

のんびりと言ったのはフィジーだ。サモアは無言で目礼した。

『はあ！？古代竜？何でこんなところにいるんだ？しかも契約したって、ウスイは本名を知らないのに……』

「こっちのうるさいのがナウルね。話は聞き流してていいから」

『オレの扱いひでえな、オイ！』

「よろしくお願いしますね」

くすくす笑いながらあいさつをするクロードに、ナウルは一瞬キョトンとした。

『……ふうん？古代竜ってのは皆偉そうなのかと思ってたが、そうでもないんだな。お前とは仲良くやれそうだ』

他の古代竜を知っているのだろうか。笑顔で差し出した手をクロードが握る。クロードって協調性があるよね。ドラゴンのイメージとは大分違うかも。敬語とか。

『それで？契約したんだっけか？コイツらは仮契約しかできないだろっに』

「ええ。あの時は止むを得なかったんです。それでもほとんどの力



を出せるのですから驚きですよ。事情があるのは聞きましたが、できればきちんと契約したいですね」

「それについては、僕も考えてたんだよ。やっぱり母親を探すしかないのかな。このままだと色々不便だろうしね。ねえ、立夏」

リスクも結構ありそうだけど。厄介事のフラグがね……。

「そうだよな。私だって契約したいし。妖精が一番得意なのは召喚魔術と精霊魔術だから」

『あら？立夏は契約したいの？』

「うん。何かパートナーみたいでいいよね。心強いし」

いつでも呼び出せるから、それは大きいんだよな。契約って。召喚魔術や精霊魔術は一応魔術なんだけど、黒魔術や白魔術とは違う。実際に魔術を使うのは自分じゃないし。戦闘の時も、契約した幻獣や精霊がいてくれると大分楽だ。

『それなら私とする？前から考えてたのよ』

「さつきも言ってたんだけどね、仮契約しかできないから申し訳ないなあ〜って」

『そんなの、別にいいじゃない。後で契約し直してくれるのでしょ？立夏って変な人につかまりそうだし〜』

確かに、それは僕も思ってたんだよな。

『お前が言うか？というか、お前で役に立つのか？』

「ナウル、フィジーは見た目ばやんだけど強いから」

『そうよ。見かけで判断しちゃダメでしょ』

特に精霊や妖精はそうだ。体が成長しないから。強そうに見える人が強い場合が多いらしい。まあ、既にフィジーよりも立夏の方が強いと思うんだけど、油断する事もあるだろうからいてくれた方が安心できる。

『ま、確かに。雨水、契約の事だが、オレ達もしないか？ここにいってもどうせ暇だしな』

ちらつとサモアを見ると、サモアも頷いた。どうやら心配してくれていたらしい。

「本人達が良いと言っているのですから、それでいいのではないですか？」

迷っている様子の立夏に、クロードが言った。断るのも失礼だろうしね。僕は立夏次第なんだけど。

「うん……わかった。お願いする。よろしくね、フィジー」

『ええ、よろしく』

立夏とフィジー、僕とサモアとナウルが契約して、その日は一緒に夕食を食べた。

正直サモアかナウルに立夏と契約してもらった方がいいかな、とも思ったんだけど、それは何か違う気がしてやめておいた。ナウルに頼んで立夏の護衛をしてもらう手もあるわけだし。普段は騒がしいけど、そういう事に関してはすごいからね。

こうして、更に月日は流れる。

LV・014 『何かパートナーみたいでいいよね』 (後書き)

次回から新章に入ります。

## 設定集？ 種族

### 人間

大体地球と同じ。違うのは目がチカチカするぐらい髪や目の色がカラフルな事。あとは、背が高い。成人した男の平均身長が百八十後半。女は百七十の中頃。寿命は八十くらい。

### 竜人

基本人間と同じ姿。竜の姿にもなれる。モンスターのドラゴンと違って魔術は使えないが、身体能力が半端なく高い。おそらく建物なんて拳一つで壊せる。生まれてから何よりも先に力の加減の仕方を習う。魔術が使えなくても、プレスは使える。ただし、人型の時は威力が弱まる。竜体の時の大きさとモテるモテナいが決まるとか戦う時にしっぽだけ出す時もあるが、邪魔になるので基本はしまっている。髪の色は必ず原色で、鱗の色と同じ。瞳は金。それ以外はない。竜人の男は基本がつちりした体つきで、身長は百九十から二百三十くらい。女はスタイルの良い人が多くて、身長は百八十から二百くらい。寿命は五百歳くらい。

### 魔族

背中にコウモリのような羽がある。色は黒、紫、赤などがある。どれも暗い色。羽は飛ぶ時以外しまっておくのが普通である。肌は浅黒く、耳は尖っている。髪の色は白っぽいものが多く、瞳は赤、紫、金など。黒魔術が得意で魔術攻撃力もあるが、妖精ほどではない。物理攻撃力も竜人の次に強い。人間よりやや小柄。寿命は五百歳。

## 翼族

鳥のような羽を持つ種族で、色は白系の薄い色。魔族と同じように、基本はしまっている。真珠のように白い肌に、やはり尖った耳。髪は金髪や薄いピンク、水色など。瞳は大抵が青、緑、橙。妖精ほどではないが白魔術に秀で、回復や補助の魔術が得意。魔術防御力は非常に強いが攻撃力が皆無。完全に後方支援系。攻撃の術はほとんど持たないが、妖精でも安易には破れない鉄壁の防御を誇る。身長は魔族と同じかそれより小柄。寿命は五百歳。

## 妖精

魔術に関しては最強。尖った耳をしている。魔力を食べて生きており、基本的に温厚な性格。ただし、怒るとかなり怖い。見目麗しく寿命が長いのが特徴。魔力は体と羽に分けて保存しており、羽を失うと死亡率が格段に上がる。美しい羽や妖精自体を狙う“妖精狩り”というものがあり、狩る人を“狩人”と呼ぶ。狩られた妖精は闇商人の手によって違法に売買される。人間達より精霊に近く、生まれた時から自我がある。そのため脳に負担がかかり、十歳までは一日の三分の二、十歳からは半分寝なければならぬ。成人すると大分マシになるが、それでも必ず八時間は寝ないと身が持たない。弱点は物理攻撃力、防御力が弱い事と羽、睡眠時間。植物と話せたり動物に好かれやすかったりする。寿命は千歳。

## 精霊

妖精の元となった種族。普通の人（妖精以外）には見えないが、力の強い精霊は自らの意思で姿を見せる事もできる。親というものがなく、自然のもの（石や木など）に宿る。寿命は特に決まってお

らず、宿っているものが死ぬ（砕けたり枯れたりする）と消滅する。また、話す時は念話のように直接頭に響くためその人にしか聞こえない。宿っているものの魔力が具現化したものなので、魔力の塊である。そのせいで理性が利かないほどおなかをすかせた妖精や子供の妖精の前に姿を現すのは非常に危険。姿は生まれた時から一生変わらない。力の強さによつて位があり、下から低位、中位、高位、皇位。宿っているものの魔力量で決まっている。低位は光のみで、自我はあるが話せない。中位も同じく話せないが、人の形をしていて意思の疎通はできる。皇位精霊は聖域の最も魔力が高いもの（リインタアの森の場合はニニアスの木）に宿る。

## 魔物

魔法を使う事ができる動物の総称。普通の動物は魔物によつて絶滅させられた。強さをランクで分けられていて、下からE、D、C、B、A、S、SSとなるが、SとSSはほとんどいない。強い魔物ほど強力な魔法を操るので体の大きさなどは関係ない。また、あまり隠れる必要もないため強い魔物ほど派手な色をしている事が多い。

## 幻獣

魔獣、聖獣、神獣の総称。いずれも人の言葉を解し、精霊と同じように話す事ができる。これらは魔物と同じようにランク分けされ、下からE、D、C、B、A、S、SSとなるが、幻獣は全てBランク以上である。

## 魔獣

B、A、Sランクの幻獣が多い。グリフィン、フェンリルなどがこれに分類される。主に火属性や地属性、雷属性、氷属性、闇属性。

## 聖獣

B、A、Sランクの幻獣が多い。ユニコーン、ペガサスなどがこれに分類される。主に水属性や風属性、木属性、無属性、光属性。

## 神獣

S、もしくはSSランクの幻獣が多い。古代竜、フェニックスなどがこれに分類される。属性は関係なし。

## ドラゴン

幻獣の一種。地竜、翼竜、古代竜とあまり知られてはいないが、神竜に分けられる（厳密に言えば神竜は別）。数え方は頭である。

## 地竜

ドラゴンの一種。空を飛ぶ事はできないが、魔法とブレスは使える。幻獣としての分類は魔獣。

## 翼竜

ドラゴンの一種。飛ぶ事はできるが、サイズが小さい。三人乗せるのがやっとの大きさ。幻獣としての分類は聖獣。

## 古代竜

ドラゴンの一種。一般的にはドラゴンの中で最強とされている。各属性に一頭ずつしかいない。普段は神竜のいる異空間に住んでお



り、姿を現す事はほとんどない。

#### 神竜

アルヴェディアの神。現在は金と銀の二頭だけしかいない。

#### 邪竜

強い負の感情に支配されたドラゴンのなれの果て。鱗は黒くなり、魔力が淀み、力が普段の数倍にまで跳ね上がる。破壊衝動が強く、理性が全くない。この状態のドラゴンはSSランクの魔物に分類される。

#### ユークエン

鳥型の魔物。真っ青な羽に黄色とオレンジのまざった尾を持つ鷲サイズの鳥。ランクはAで、高級食材として知られている。属性は風。

## 設定集？ 魔術と魔法

### 魔術

黒魔術、白魔術、精霊魔術、召喚魔術、錬金術の五つ。黒魔術は火、地、雷、氷、闇属性をいう。主に攻撃に特化した魔術。反対に白魔術は水、風、木、無、光属性の防御や回復などのサポートに特化した魔術。精霊魔術は妖精にしか使える者はいないと言われるほど使い手がおらず、召喚魔術も精霊魔術ほどではないものの使い手が少ない。精霊や幻獣と契約して力を貸してもらおう魔術だが、相手を見下していると呼びかけにも応じてもらえない模様。どの術も長い詠唱が必要だが、アルヴェディアでは無詠唱や詠唱カットもできるようになってる。唯一詠唱不要の錬金術は、主に薬を作ったり武器に能力を付与するためのもの。錬金術師は自分で作った爆弾などで戦う場合が多い。

### 魔法

魔物や幻獣が使う術。魔術とは違い、どんなに大規模なものでも無詠唱で発動できる。その代わり、一体につき一属性しか使用できない（神竜は別）。強い魔物や幻獣ほど上級の魔法を使用する。

くランクについて

魔術にはランクが存在する。魔物などのランクとは違い、下から初級、下級、中級、上級と分けられる。初級、下級魔術は才能のある人なら無詠唱可能だが、中級になると難しい。上級魔術では詠唱カットですら難しく、長い呪文を唱えなければならない。ゲームでは敵のレベルが初級はLv・10、下級はLv・30、中級はLv・

60くらいを超えるとあまり大きなダメージを与えられなくなっていた(目安ではE L V・10、D L V・25、C L V・45、B L V・65、A L V・80、S L V・90、SS L V・100)。アルヴェディアでの魔術は三百年前の全盛期よりもレベルが低くなっているらしく、ランクが一つずつ下がっている。初級がなくなり、上級は古代魔術と呼ばれる伝説級の扱いになっているようだ。魔法も同様。

↳ 無詠唱と詠唱カット

無詠唱は一言も話さず、想像+魔力のみで発動させる方法。詠唱カットは呪文を短く省略する方法。無詠唱や詠唱カットにはかなりの想像力、魔力、技術力がある。

ちなみに……

「L V・004」で雨水が使った魔術、「セルーション」。黒魔術の中の風属性魔術で、ランクは下級。アルヴェディアでいうところの中級魔術。元々の呪文は「広大な大地を駆け抜ける風よ、我の元へ集い我が意に従え      セルーション」を「駆け抜ける風よ、我に従え      セルーション」に省略したもの(詠唱カット)である。小規模な竜巻を起こす魔術。

**設定集？ 魔術と魔法（後書き）**

次回から設定は後書きに書きます。

Lv・015『よかった！歩かなくていいんだね？』

僕はね、別にロリコンとかシヨタコンを否定しているわけじゃないんだよ。世の中にはそういう人もいるんだって事は理解してるし、ましてや長寿で成長が止まる種族がいるこの世界ならそういうカッブルが地球以上にありうるのもわかっている。

ただね、僕や立夏がその対象にいますという事は認めたくないし、そういう対象に見られるのはゾツとする。他でやってもらう分にはかまわないんだけど。……誰だってそうでしょう？

つまり、何が言いたいのかというと。

予想外に早く成長が止まった。気付いたのは一年くらい経ってからだけど、後から思えばある時期からピタリと止まっていた。

あまりに早いからもう少し様子を見ようという事になって、そろそろ一年経とうかという頃。僕は立夏とクロードに切り出した。

「これからの旅について話し合っておくべきだと思うんだけど」

近々出発すべきだと考えている僕としては、大まかにでもどうするのか決めておきたい。

「そういえば、あんまり話してなかったね」

「うん。でも、さすがにそれはどうかと思って」

見た目でなめられたり心配されたりするだろうけど、成人してるんだし旅するのは問題ない。実力は数ヶ月前にラバトに保証してもらったしね。

「まず行き先だけど、聖域の近くは魔物も多いから町や村が少ない前にラバトが言っていたルルス村、トリアナ、マツシューブのどれかがいいと思う」

一番近いルルス村でも徒歩十日、中心部から森を出るまでに五日というかなりの距離だ。まあ、こればかりは仕方がない。

「で、僕としてはマツシューブがいいかな」

「マツシューブって、二十日？二十五日も歩くの？」

「なぜそう思うのですか？」

半月以上も歩く事に渋面を作る立夏と、純粹に疑問に思ったらしいクロード。僕はここ数日考えていた事を二人に話した。

「僕らは馬を持っていないし、そもそも乗れないよね。だから、移動手段はどうしても徒歩になる。結局、どこへ行こうと大して変わりはないよ。それからお金の問題。僕らに食費はかからないけど、食料はあるに越した事はない。魔力切れなんて洒落にならないからね。宿代とかもいるし、着の身着のままというわけにはいかないでしょう？そう考えると、ギルドに入るのが一番なんだよ。でも、ギルド登録はある程度大きい街じゃないとできない」

「ああ、それでマツシューブなんですな」

「そういう事。ルルス村にはギルド自体ない可能性が大きいし、トリアナは登録できるかどうか怪しい。その点、マッシュューブなら確実だ」

マッシュューブはレソト川の下流になるが、情報収集にも都合がいい。第一、川を流れて来たからといって川の上流に出身地があるとは限らないのだ。手がかりくらいはあるだろうけど。

「それならしょうがないなあ。森に馬型の魔物がいたらよかったのにね」

「馬は平原や山ですよ」

ユニコーンは森のイメージだし、ケルピーは川に生息するんだけどね。魔物と幻獣はそういうところも違うんだろうか。

おっと、閑話休題。

「それで、行き先はマッシュューブでいいんだよね？」

「うん。仕方ないね。飛んで行けたらいいんだけど」

密室や聖域以外で羽を出すのは危険だからね。幸いにも僕らは天族にしか見えないのだし、天族のふりをしていればいいと思う。天族だって、種族的に見れば白魔術が得意ってだけで他の魔術が使えないわけじゃないし。クロードには立夏が乗れない。途中まで乗せてもらうのもダメだ。

「魔術で飛べば良いのでは？」

「魔術？」

思いがけない言葉に、僕はただ繰り返して聞いた。

「魔術、か……風と結界を組み合わせたらできない事もないのかな？でも、いくら妖精でも魔力が持たないな」

聖域から遠ざかると、土地の魔力は少なくなる。僕らの場合食料でもいいんだけど、大量に食べないとダメなんだよね。そんな荷物を持って飛ぶなんて、非効率だ。

『ニニアスの果実を持って行けばよい』

突然聞こえた声に、立夏がびくつと震えた。気付いていた僕は普通に返す。

「ニニアスの果実って、黄色いアレ？」

『そうじゃ。丁度、もう少しすれば生る季節じゃしの。ニニアスの果実には普通の果物とは比べ物にならないほどの魔力が宿っておる。同様に枝や葉にも宿るのじゃが、あれは摘んだ時点で死ぬからの。除々に魔力が抜けてしまうのじゃ。しかし、果実は摘んでもしばらくもつ』

「成程、それなら大丈夫だね。果実って確か手のひらサイズでしょっ？」

『ああ』

「よかった！歩かなくていいんだね？」



立夏が心底ホツとしたように言った。

「ただし、練習がいるけどね」

空中でバランスをとるのは容易ではないだろう。足がつかないのだから、全ては自分のコントロールにかかっている。

「それぐらい、歩く事に比べたらどうって事ないよ」

歩くのが心底嫌だったらしく、立夏はハッキリと言い切った。

LV・016 『実ができたら出発だね』

飛行魔術っていうのは思ったよりも難しい。まず、黒魔術と白魔術を組み合わせるからどちらも使える人じゃないと無理だ。まあ、その辺りは心配ない。何せ魔術チートの妖精だから。

問題は飛んだ時のバランスの悪さ。足がつかないからグラグラするのだ。安定させるには相当な集中力がある。ちよつと操作を誤っただけで真つ逆さまだ。

「……無理。これは無理だ」

僕は首を振りながら言った。旨く飛べるようになるまで二、三年はかかりそうだ。出発するのは今年であって、二、三年後ではない。

「立夏、あきらめな」

「うっ……」

僕と同じくバランスを崩して転倒した立夏は、むすつとしながら唸った。

「できると思っただのになぁ……仕方ない、歩くしかないのかぁ」

「まあ、飛行魔術を使えたとしても街の近くで飛ぶわけにはいかないんだけどね」

何せ、オリジナルの魔術だ。目立つ事この上ない。

「森に乗れそうな魔物とかいなかったっけ？」

「いても悪目立ちするからやめてね」

巨大な熊とかに乗るわけにはいかない。第一、魔物を手手なずけるのはかなり難しいのだ。家畜にされている魔物は始めから人間が育てているものだし、幻獣と違ってこちらの言葉が通じない。それどころか、知性がないようなのがほとんどだからね。

「でも、ニニアスの果実はもらって行こうか。干したりできないかな？」

「あれって食べた事ないけど、おいしいの？」

立夏は少しずつ色づき始めた果実を眺めて言った。中心部にあるものだから、魔物が食べる事もない。いつもいつの間にかなくなっているのだ。

『ニニアスの実か？すっげー美味いぞ』

「え、ナウル食べた事あるの？」

『ああ。ここの精霊は皆あるんじゃないか？毎年数が少ないから、順番にもらってるんだ。力が上がるし、オレ達にとっては貴重なものなんだ』

「へえ、それは知らなかった」

精霊達がいつの間にか近くにいるのはよくある事なので気にしない。特にナウルは暗殺術が得意なだけあって、僕でも気配が読めない時がある。元々精霊ってあんまり気配しないし。

「ねえ、どんな味がするの？」

立夏が好奇心いっぱいに尋ねた。

『ん〜……何ていうか、不思議な味？食べた人によって違うみたいなんだよな……』

『その人が一番好きな味になるのよ』

フィジーがのんびりと答える。

「好きな味？じゃあショートケーキとかかなあ？チョコレートも好きだけど……」

「苦いものが好きだったら苦くなるの？」

『聞いた事はないけど、きつとそうじゃないかしら。辛いものが好きな人は辛くなったから』

それなら僕は甘酸っぱい感じかな？メロンとかみたいに甘すぎるのは苦手だし。

「あぁっ！早く食べてみたいなあ」

「毎年四つぐらいしか生らないんだし、非常食だよ。いざという時

なかつたら困るでしょ」

「いいでしょ、一つぐらいい」

「ダメ」

いくら立夏でも許可できない。魔力がなかつたら死活問題なんだから。理解しているのだろうか。

「後のお楽しみにしておきなさい」

「むう……はあい」

『リツカは食べるのが好きね』

『そんなリツカもかわい……ぐふっ』

「何か言つたかな？」

『いえ、何でもありません！』

不満が顔に出ているけど、まあ許してやるか。僕は寛容だからね。

「でも歩くんだつたらさ、出発するの早い方がいいよね？」

「そうだね。この辺は雪が積もったりしないけど、寒い中を歩くのは嫌だし。歩きやすい内がいいよね」

ニニアスの果実が生るのに、もう一ヶ月もかからないだろう。大体十日から十五日ぐらいいか。

「実ができたら出発だね」

今で大体十月の初め辺り。日本と同じ暦だからすごく助かっている。違うのは閏年がない事ぐらいだ。クロード曰く、神様が面倒くさいって省いたらしい。閏年がないからって日にちが狂う事はないので、ピッタリ三百六十五日なのだろう。

「実ができたら、かあ」

「どつしたの、立夏？」

「ううん。なんか長いようで短かったなあって。まだ十六歳なのにねえ」

その話題避けてたのにサラッと言われた！

そう、僕は今十六歳だ。成長が止まったのに気付いたのが一年前。その半年ぐらい前から止まっていたと見える。しかも、ラバト曰く童顔&女顔だから十二、三歳に見えるらしい。イイ笑顔で親指を立てたラバトには雷を落としてあげたけど。

つまりは、ロリとかシヨタの範囲内なんだよね。見る人にもよるんだろうけど。精神年齢は三十歳すぎているからすごく複雑だ。体に引つ張られてか、あんまり三十歳って感じはしないけどさ。

自分の身と何より立夏の身を案じていた僕だが、立夏が姉妹にしか見えない事を「都合がいい」と思っている事なんて知るよしもな

か  
っ  
た。  
。

キャラクターファイル No.1 (前書き)

ネタバレはできるだけないようにしています。



## キャラクターファイル No.1

名前：雨水・リーンテア

一人称：僕

二人称：君

性別：男

種族：妖精と人間のハーフ

外見：ふわふわの金髪に新緑の瞳。髪は肩より少し長いくらいで、後ろの低い位置で一つに括っている。髪の長さ以外は立夏とそっくり。濡羽色の羽を持つ。

武器：レイギル（真つ黒な大鎌）と暗器類

性格：腹黒&シスコン。ロリコンやシヨタコンが大嫌い（自分がそれに当てはまる容姿をしているから）。立夏のためならなんでもするし、余程の事が無い限り立夏に隠し事をする事はない。立夏に色目を使う男は全力で排除する。

備考：双子の兄。前世の記憶がある。魔術は全て使えるが、特に黒魔術と精霊魔術、召喚魔術が得意。暗殺者紛いの事も得意。ゲーム時代は“金の悪魔”と呼ばれていた。女顔がコンプレックス。リーンテアは仮名。立夏とだけ念話ができる。

名前：立夏・リーンテア

一人称：私

二人称：あなた

性別：女

種族：妖精と人間のハーフ

外見：ふわふわの金髪に新緑の瞳。髪は腰辺りで、ポニーテールにしている事が多い。髪型以外は雨水とそっくり。乳白色の羽を持つ。武器：ユネルの杖とイスターシャ（弓）

性格：腹黒&ブラコン。雨水曰く天然の毒舌。腹黒も天然か？他人をいじって遊んでいる事が多々ある。雨水が女の子に見られる事は、シヨタコンなで変な虫がつきにくいので歓迎している。ただし、別の意味で変な虫がつく事も心配している。

備考：双子の妹。前世の記憶がある。魔術は全て使えるが、特に白魔術と精霊魔術、召喚魔術が得意。弓の腕は百発百中。ゲーム時代は“金の天使”と呼ばれていた。リーントアは仮名。雨水とだけ念話ができる。

Lv・017』さて、じゃあ行って来るよ』

いよいよ出発の日が来た。

契約した精霊とか幻獣は、一緒に行動しないのが普通だ。用がある時だけ呼び出す。だから召喚魔術、とかって呼ばれてるんだけど、クロードはついて来る気らしい。まあ、正直僕らだけだと見目の良い子供の二人旅にしか見えないから、見目麗しかろうと強くは見えない外見だろうとある程度大きい姿をしているクロードはありがたい。

「竜人にならない？」

と聞いたら、

「あんなゴツイ姿になりたくないです」

という答えが返ってきたので、仕方なく人間の姿だ。さすがにクロードまで妖精はマズイ。羽さえ出さなければ妖精だとバレないが、万が一という事もある。髪や目の色的に、魔族や翼族という選択肢はなかった。

「さて、じゃあ行って来るよ。時々帰って来るから」

『いつてらっしやい』

めずらしく、ユーランが微笑んだ。一瞬固まってしまったのは不可抗力だ。仕方がない。

「呼んだ時はよろしくね！」

『もちろん。気をつけてね』

『リツカ、いつでも呼んでくれてい……ぐはあっ！』

「ナウルが契約したのは僕だからね？忘れてないよね？」

『じよ、冗談だつて！』

サモアはなぜ学習しない、と言いたげな視線をナウルに向けた。

「じゃ、サモアも行って来るから」

『ああ』

「呼んだら助けてね。サモアは当てにならないから」

『当然』

『ウスイひでえ！サモアもそりゃないだろ！』

何を期待してるんだか、コイツは。

『二人とも大きくなったのお。世界は広い。存分に楽しんで来るといい』

「はい」

「うん」

『紫竜公も、二人を頼みました』

「ええ、頼まりました」

僕は笑うと、皆に背を向けた。

「な、長い……」

体力はまだまだ大丈夫だろうが、精神的疲労からか立夏がぐったりした様子で言った。

「まだ森を抜けないとか……」

「そういえば森から出た事ってまだないよね」

「それどころか中心部から三日以上の場所は初めてだよ」

立夏は気分を変えるためか、激しく頭を振った。

「立夏、そんなに振ったら馬鹿になるよ」

「いいよもう、それで」

頭を振っても大して変わらなかったようだ。森だけで五日つてちよつと異常な距離だよね。レソト曰く、魔力が多いから植物の成長も早くなっただけらしい。

「今日目だっけえ？」

「四日目。明日か、早ければ今日にでも出られると思うけど。かなりハイペースで来たし」

というか、五日というのは魔物と遭遇して戦う時間もある程度は入っているのだ。その点でいえば、僕らは必要以上の戦闘をしていないから早いはずだった。そもそも魔物が近寄って来ないし。

「森抜けてもまだあるんだよね……」

「はは……まあ、その辺はあんまり考えない方がいいよ」

僕だつて決して歩くのが苦痛でないわけではない。でも、これからはほとんど歩きだろうから慣れておくべきだとは思つ。

「ほら、あと少しですよ。頑張ってください」

クロードが前を見ながら励ました。（精神的に）疲れて下ばかり見ていた僕らも、反射的に前を向く。

「うわあ、あとちょっとだね！」

立夏が目に見えて元気を取り戻した。数十メートル先から向こうには、木が一本も見当たらない。精々草がところどころに生えている程度だ。コンクリートで覆われた地面や草木が多い森を見慣れた僕には驚きの光景だった。

「すごい見晴らしがいい場所だね」

森から出ると、立夏はキョロキョロと辺りを見回した。

「こんなところに出る魔物は空を飛ぶか、足が速いんだろうね」

「ダチヨウみたいなの？」

「……念のために言うておくけど、ダチヨウは空飛ばないからね」

「え、嘘お！？鳥でしょう？」

「飛ばない鳥もいるんだよ。足が速いのは確かだけど」

まあ、人間よりも遅い動物はそういない。同じように、飛ばない妖精より遅い魔物は滅多にいないはずだ。見晴らしがいいからって油断はできない。

「川の魔物も忘れてはいけませんよ」

「ああ、そうだね」

僕は頷いて隣を流れる川を見た。

マッシュューブへはレソト川に沿って行くのが一番確実だ。マッシュューブ自体レソト川の流域にあるし、聖域に来るような人は妖精か精霊でもない限りいないから道もない。迷ったりしたらお笑い草だ。その点、川の近くを通れば迷う心配はなかった。

ただし、近付きすぎには要注意。川にだって魔物はいるし、とっさに動けなくなってしまうからある程度の距離は置いた方が賢明なのだ。クロードが言いたいのはそういう事である。

「ね、雨水。川の魔物って食べれたよね？」

「んー？確か、魚型のは毒にさえ気を付ければ大丈夫だったと思うけど」

「やったあ！じゃあ、今日は何か作ろうね！」

数年前ならこちらが食われていたような魔物なのだが、これが自然の摂理なのか。アルヴェディアは地球以上に弱肉強食で、立夏はかなり強かであった。



『Lv・018』よくわからないけど邪魔だ。始末しよう

「ねえ、ワイバーンって食べれるのかな？」

立夏が目キラキラさせて言った。

「食べれない事はないかもしれないけど、あんまりおいしくなさそうだよ」

「進んで食べたくはないですよね」

クロードが苦笑を浮かべる。

「皮ばかりだもんね。あきらめた方がいいかなあ」

がっかりしながら言う立夏の視線の先にいるのはワイバーンの群れ。ざっと十匹だろうか。……あれ、ワイバーンの数え方って匹？羽？頭？

ワイバーンは僕らの頭上を旋回するようにして飛んでいる。狙う気満々だ。

「転生してから初めて見たけど、おっきいなあ」

のんびりと言う立夏。その余裕は十六年間の努力からきているのだろう。この距離だと一撃で倒せるし。

「食べるかどうかは別として、倒したらお金にならないかな？」

「ワイバーンのどこが売れるんですか？」

「えっと……皮、とか？」

なんとなく爪や羽が売れそうには思えない。肉も同様だし、牙はないだろうから。ああ、ワイバーンの外見はプテラノドンと小型ドラゴンが混ざったような感じだ。一応ドラゴン的一种である。時々こちらに威嚇をするとところを見ると、近くに巣があるのかもしれない。

……ん？

「確か、ワイバーンは山に生息するんだよね？」

「ええ、そのはずですが」

草木のない山のとっぺんや、崖に巣を作るはずである。

「あれ？じゃあ何でここにいるの？」

立夏が首を傾げた。

近くに山はあるが、エサを探しに来たにしては遠すぎる。という事は、当然縄張りに入ってしまったわけでもないし。第一……。

「ワイバーンって群れを作らない魔物だよな？」

そう、ワイバーンはドラゴン的一种である。ドラゴンに分類される種は、力に関係なく群れないのだ。子育てはするし、子煩悩な面

はあるが。

これはおかしい。何かあるに違いない。

立夏やクロードもそう感じたらしく、考えるような目付きでワイバーンを見上げた。

ワイバーン同士が争う様子は全くない。縄張り意識は強いが知能は高い魔物なので、協力せざるを得ない状況だという事だ。余程食料が足りないのだろうか。これから冬だから、冬眠はしないまでも食料を集めるぐらいはしそつである。

まあ、いいや。

考えてもわからないものは考えるだけ無駄だ。それよりも、このまま何事もなかったかのように歩き出していいだろうか。

お金にならない上に腹もふくれない以上、こちらにワイバーンを倒す意味などない。体力の無駄である。ワイバーンごときでへたばるほどやわな体はしていないが、十となると微妙だった。少し疲れるかもしれない。

しかし、ワイバーンが素直に通してくれるだろうか。奴らがなぜここにいるのかは置いておくとして、僕らの上を旋回しているのだ。しかも威嚇のおまけ付き。すんなり通れるとは思えない。

「……よし、よくわからないけど邪魔だ。始末しよう」

僕は一人で頷いた。うつかり油断して立夏が怪我でもしたら大変だ。すぐに治せるが、痛みはどうにもならない。

手の届く範囲ではないので、魔術を使おうと集中する……が。

近くに別の気配を感じて、僕は目を走らせた。

「オラア！よくも逃げやがったな！このトカゲもどきが！」

言葉と共に割り込んで来たのは背中に紺色の羽が生えた青年。肌は黒く、青みがかかった銀髪だ。腕をむき出しにした動きやすそうな格好をしている。

彼の後から、赤い髪の竜人も現れた。竜人の例に漏れずがつちりとした体つきで、背中には大きな両手剣を背負っている。年齢は二十代後半から三十代くらいだろうか。

「大丈夫か？子供を二人も連れて何をやっているんだ」

竜人の男がクロードを責めるように言った。クロードは肩を苦笑してすくめる。確かに、状況から考えるとそう見えなくもない。

『雨水』

僕は立夏をちらっと見た。立夏が頷く。僕らの気持ちは同じらしい。

【炎の豪雨よ　　ファイアレイン】

僕と立夏が同時に唱えると、通常の二倍以上の威力を持った魔術

が発動する。

「うお！？つぶね！」

ワイバーンしか見えていない様子だった魔族の青年が慌てて飛び退く。その身のこなしはしなやかで美しく只者ではない事がうかがえる。まあ、近づくまで僕が気付かなかった時点でわかっていただけ。

ワイバーンが燃えているのを確認すると、僕らは互いを見もせず口に開いた。

【【レイン】】

今度は普通の雨が降り注ぎ、火を鎮火した。後に残ったのは炭化したワイバーンのみ。

「お見事です」

クラウドは満面に笑みを浮かべて手を叩いたが、魔族と竜人の顔は引きつっている。

それもそのはず、“ファイアレイン”と“レイン”は下級魔術  
現実世界のアルヴェディアで言うところの中級魔術だ。クラ  
ンクの魔物であるワイバーンに致命傷を与えられる魔術ではない。  
だが、目の前でワイバーンは消し炭になった。致命傷どころではな  
い、圧倒的な火力で。

さて、子供扱いされた事とクロードを責めた事にイラツとしてや  
ったけど、どうしようか。

そう思って二人を見ると、見覚えがある事に気がついて目を見開  
いた。立夏も気付いたようで、ぱちくりしている。

「アクセルとディラク？」

立夏の口から漏れた名前に、彼らは怪訝そうに眉を寄せた。

LV・018『よくわからないけど邪魔だ。始末しよう』(後書き)

ワイバーン

Cランクの魔物。プテラノドンと小型ドラゴンを合わせたような外見。属性は個々により異なる。ドラゴンの一種で群れをなさず、山などに生息する。売っても金にはならない。

ファイアレイン

火属性の中級魔術(ゲームでは下級)。炎の雨が降る。稀に相手を火傷させる。

レイン

水属性の中級魔術(ゲームでは下級)。防御力を低下させる小規模な雨が降る。

『L.V・019』『うわッ！デーモンとミカエルかヨ！？』(前書き)

今回は短めです。



Lv・019『うわッ！デーモンとミカエルかヨ！？』

ゲーム時代。僕と立夏が“金の悪魔”“金の天使”と呼ばれていた時代だ（ととっても、ゲームとこの世界は似ているだけであって全くの別ものなのだ）。

僕や立夏の周りには、なぜか極端に人が少なかった。古参であるにもかかわらず、交流のあるプレイヤーはほんの一握りだったのだ。“悪魔”である僕だけならまだしも、“天使”と呼ばれる立夏まで。

その数少ない交流の中に、アクセルとディラクはいた。

アクセルは魔術よりも刀をメインで使う魔族だ。なんでも、外見は魔族が好みだが武器は刀が良かったらしい。魔術は補助程度という、物好きなプレイヤーである。そして戦闘狂としても有名だった。

ディラクは大剣を軽々と振り回す巨漢だ。誰が見ても強そうだが、と答える外見に反して性格は温厚。常に冷静を心がけ、気配りもできるまとめ役である。暴走しがちなアクセルを上手くコントロールできる貴重な人物だ。幼馴染みだと聞いている。

僕らの目の前にいるのは、そのアクセルとディラクに違いない。

「何でオレ達を知ってるんだア？」

「それほど有名でもないはずだが……」

首を傾げる二人に、僕はニヤリと笑う。

「ドラゴンに飲み込まれて尻から出て来たアクセルとディラクだろ？前に酔っ払って「ママぁ」とか言ってたっけなぁ？アクセル？ディラクは泣き上戸だったよなぁ？」

「ゲツ、何でそれを……」

「その口調、まさか……いや」

「アクセルさんもディラクさんも忘れたんですか？ひどいですっ」

立夏が泣き真似をしてみせる。前世のキャラは童顔ではなかったが、金髪である事も相まってそっくりだ。

「ヘルとエル、か？」

「うわッ！<sup>デーモン</sup>悪魔と<sup>ミカエル</sup>天使かヨ！？」

そう、前世で使っていたキャラクターの名はヘルとエル。正確にはサディヘルとシェリエルだ。二つ名は“金の悪魔”と“金の天使”。金は金髪からだが、悪魔は黒魔術の使い手である事、天使は白魔術の使い手である事からきているらしい。別名デーモンとミカエルである。デビルとエンジェルではない。

「あつたりー！ま、前世の話であって、今は別人だけどね」

立夏が明るく言う。

「どつという事だア？」

「話は歩きながらにしよう。……ああ、そつだ。こつちはクロードだよ。事情があつて僕ら以外は名前を呼べないんだけど」

僕はクロードを示しながら言った。クロードは軽く会釈する。

「呼べない？」

「正確には呼んではいけないかな。一族の掟みたいなものでね、呼ばれたら（呼んだ人が）死ぬから気をつけて」

「そんな事で（クロードが）死ぬのか？」

「はい。だから呼ばないでくださいね」

完全に誤解されているのに気付いていながら、クロードはにっこりと言った。まあ、わざわざ誤解されるような言い方をしたのは僕だけだね。

「名前の一部を取るのはいいの力？」

「かまいませんよ」

「よし、ならお前はクロードナ。これなら呼びやすいし、とつさの時も反応できるだろ？」

「クロ、ですか。わかりました」

クロードは頷き、差し出された手を握った。

「よろしくナ」

「はい」

「あー、ところで」

クロードとアクセルを横目で見ながら、ディラクが口を開く。

「お前ら行き先は？」

「マツシューブだよ」

「そうか。それなら同じだ。聞きたい事はたくさんあるのだが……」

「ちゃんと話すから」

僕は苦笑しながら言い、皆を促して歩き始めた。鎮火済みとはいえ、ワイバーンを燃やしたせいで焦げ臭い。あまりこの場に留まりたいとは思えなかった。

それにしても、アクセルとディラクに出会えたのは思わぬ幸運だった。ラバトにある程度の話は聞いていたが、話に聞いただけなのと実際に近くにおいて助けてくれる人がいるのでは全然違う。二人には悪いが、ぜひ巻き込まなくては、と思った。

キャラクターファイル No.2 (前書き)

総合評価が600を超えてびっくりしました。  
ありがとうございます！

## キャラクターファイル No.2

名前：レソト・エクシフォード

一人称：わし

二人称：おぬし

性別：男

種族：精霊

外見：白髪で立派なおひげのおじいさん。細身で仙人みたいな外見をしている。

武器：不明

性格：おおらか。

備考：三百年前は妖精のふりをして旅をしていたらしい。エクシフォードは冒険者時代の偽名。博識。リーンテアの森にあるニニアスの木に宿っている皇位精霊。

名前：ユーラン

一人称：私

二人称：あなた

性別：女

種族：精霊

外見：雨水曰く十人並み。栗色の髪と瞳の女性。

武器：無し

性格：面倒見が良い。

備考：敬語キャラ。どう見ても一流の体術を習得しているが、本人

曰く護身術。リーントアの森にあるマニの木に宿っている高位精霊。

## キャラクターファイル No.3

名前：ラバト

一人称：私

二人称：お前

性別：男

種族：妖精

外見：人間で言うところの二十代。紺色でストレートの背中の中頃まである髪。瞳は金。透明の、見方によっては虹色にも見える羽を持つ。

武器：不明

性格：美形なのに残念。美しいものやかわいいものが大好き。

備考：雨水と立夏に一般常識や地理などを教えた。色々謎な人。

名前：フィジー

一人称：わたし

二人称：あなた

性別：女

種族：精霊

外見：ウェーブのかかった肩にギリギリつくぐらいの髪。色は薄いオレンジ。同色の瞳。

武器：弓、棒

性格：のんびりしていてマイペース。立夏以上の天然？

備考：立夏に弓術と棒術を教えた先生。そばかすを気にしている。





Lv・020 『ヘルとエルの記憶を持った妖精だよ』

「さて、話を始める前に聞きたいんだけど、アクセルとディラクはどこまで状況を把握しているの？」

僕は隣を歩く二人を見上げながら言った。

「そうだな……まず最初に理解したのは、どういうわけか“アルヴェディア”によく似た世界に来てしまったらしいって事だな。それから、全員元の世界では死んでいるという事。死んだ記憶のない者もいたが、いつ死んでもおかしくない状況だった。幸いにもゲームのキャラクターの姿だったし、力も問題なく使えたから生きるのに然程苦労はしなかった。それが三百年前」

「トリップした理由はサツパリだったナ。まあ、一度は全員死んだんだし、戻りたいとか考えるヤツはいなかつた。魔物を殺すのには抵抗があるヤツもいたカラ、その後の生活は色々だけどナ」

元々平和な日本にいたのだから、現実世界で冒険者になれというのは無茶な話なのだろう。たとえ力があっても、それを生き物に向けるのは難しい。僕達がちよつと特殊だったただけだ。

「人間だった人達はやっぱり死んだ？」

「ああ。今生きてるのは人間以外の種族で、殺されなかつたヤツだけダ。あれだけレベルが高かつたら事故でも死なないからナ」

「こちらの病気なども、白魔術で治る。普通に生活していれば寿命

まで生きられるだろうさ」

竜人、魔族、翼族の寿命は五百歳である。妖精も千年生きるため、三百年程度で死ぬ事はない。尤も、アルヴェディアに来た時点で何歳だったかにもよるのだろうが。この分だと、おそらく実年齢だったに違いない。

「そっかー……何人ぐらい来てたの？」

「ざつと三十人程度だな。若干の時間差はあったが、全員半年以内にこちらへ来たようだ。今生きているのは大体半分か」

「ユファと七瀬ななせ、智ともゆきもいたゾ。……智之はもういないケド」

懐かしい名前だ。僕らの体感時間で言えば、そんなに時間は経っていないはずなのに。

「ユファと七瀬はいるんだ？会えたらいいな」

立夏がにこにこと言う。

「会えるさ。今、この国にはいないけどな」

ユファはユファーナという翼族の女の子だ。翼族はなんとなく儂いようなイメージがあるのだが、男勝りで豪快な女性である。白魔術師というよりは女剣士と言われた方がしっくりくる感じだった。

七瀬は関西弁で話す陽気な盛り上げ役だ。空気を読むのが苦手らしくKYなのだが、なぜか憎めない。面倒見がいいお人好しでもあるので、よくトラブルに巻き込まれる苦労人だ。

「……あれ、七瀬は人間じゃなかったっけ」

「そうなんだけどな、あいつヴァンパイアの称号持っていたらろう？あれは倒した敵の寿命を吸う事もできるらしい」

「何というチート」

「だよな」

“ヴァンパイア”はドレイン機能がついた剣で戦いまくったらついたという称号だ。しかも半端な数ではなく、軽く五千匹以上はそれで倒したらしい。吸わないようにする事も、吸う対象を体力（HP）や魔力（MP）にする事もできるそうで、ゲームにはなかった予想外の能力である。

「じゃあ、次は僕らの番かな」

「あ、私から話すよ。さっきから雨水ばかりだし」

「「雨水？」」

アクセルとディラクは首を傾げた。

「そう。私と雨水……ヘルはトリップじゃなく転生したんだよ。この世界の住人として」

ゲームのキャラクターではなかった事がその証拠だ。最初はキャ

ラクターが子供の頃の姿なのかな、とも思ったが、目の色が違う。成長してみれば、顔立ちも違う。キャラクターは肉体年齢十五歳じやなかったし、髪はストレートだ。当然の事ながら男の娘でもない。

第一、確かに前世の記憶は持っているが別人なのだ。人格は違っており、記憶にしたって自分だっという実感はあまりない。でも、前世で学んだ事はしっかり身につけている。

「転生？そんな事があるのか」

「でも、その外見の説明はつくよナ。同じ金髪でも全然違うゾ」

それはそうだろう。サディヘルは二十歳くらいの青年、鋭いようなイメーজだ。対して、僕は十三歳くらいにしか見えない少年の姿である。雰囲気も大分丸い。それにシェリエルはほんわかした天然少女だったが、立夏は元氣いっぱいのアクティブな少女だ。外見だけでなく、人格の違いも大きい。

「私は立夏、ヘルは雨水っていう名前だよ。また双子で、雨水が兄。これでも一応十六歳」

「もう一、二歳下なのかと思っていたが」

「十六だよ。成人した大人だからね？妖精の成人は成長が止まったからだし」

「ラバトより推定年齢が高いのは童顔の多い日本人だったからだろう。」

「オマエらまた妖精な力？」

「そうみたいだね。金の悪魔と金の天使は健在だよ」

もちろんパワーアップして。

「それで、アルヴェディアに生まれたはいいけど捨てられたみたいでね」

立夏はリーンテアの話をした。精霊に育てられた事、ラバトに出会った事。クロードについては僕が話し、古代竜である事は伏せておいた。二人を信頼していないわけじゃないけど、あまり言いふらすような事でもないから。

「なるホド。つまり、オマエらは正確に言つとデーモンとミカエルじゃないんだナ？」

「そうなるかな。ヘルとエルの記憶を持った妖精だよ」

「それなら呼び方も変えた方がいいか？」

「いえ、そのままの方がいいのではないでしょうか」

今まで黙っていたクロードが口をはさんだ。

「雨水様と立夏さんのお母様は、何やら深い事情がおりのようなようです。何かあるかわかりませんが、本名は名乗らない方がいいと思います」

「そうだね。じゃあ、サディヘルとシエリエルの名前をもらおうか。僕もこれからクロードをクロと呼ぶから」

「私も。だから、クロードもエルって読んでね」

立夏が言っていると、クロードははい、と言って微笑んだ。

## キャラクターファイル No.4

名前：サモア

一人称：俺

二人称：お前

性別：男

種族：精霊

外見：銀髪に同色の瞳。二十代後半の外見。

武器：鎌

性格：無口だが、さり気ない気遣いができる人。

備考：雨水に鎌を使った戦闘を教えた先生。存在感がないわけではないが、空気になりやすい。

名前：ナウル

一人称：オレ

二人称：お前

性別：男

種族：精霊

外見：黒髪に同色の瞳。二十代前半の外見。

武器：暗器類

性格：おしゃべりでいじられキャラ。聞いてないのにしゃべる。

備考：雨水に暗器の扱い方や暗殺術を教えた先生。外見で油断されやすいので、雨水は暗殺術に向いていると思っただらしい。





閑話01 妖精は強い？弱い？(1) (前書き)

ゲーム時代の話です。

閑話01 妖精は強い？弱い？（1）

青年はだるそうに首をコキツと鳴らした。

スラツとした長身で、癖のない鮮やかな金髪。赤い目は半分も開いていない。端正な顔立ちではあるのだが、いかんせん青年本人の態度がそれを半減していた。

身にまとっているのは黒や紺を基調にしたローブ。切り込みが入っていたりと、動きやすいように工夫されたものだ。細かな刺繍といい、並大抵の代物ではない事は一目でわかった。

青年の隣には小柄な少女が立っている。

青年と同じく鮮やかな金髪で、腰まで真っ直ぐなストレート。目は赤に近い濃いめのオレンジだろうか。可憐な美少女といった感じで、すれ違う人々の目を集めている。声をかけられないのは隣にいる人物から放たれる威圧感のせいだろう。

青年とおそろいの茶色を基調にしたローブを着ていて、会話がないにもかかわらずにここにことしている。気まずそうな様子は全くない。

「遅いですね」

「そうだな」

青年が深々とため息をつく。少女が気遣わしげな目を向けたが、

何も言わなかった。

二人がいるのはトマシオという町だ。それほど大きくはない港町だが、いくつかの無人島に定期船が出ているためにプレイヤーが訪れる事は多い。すれ違う人々も半数以上がプレイヤーである。

スツと指を空中へ向け、画面を開いた。右下に表示される時間を見て、再びため息をついた。頭一つ以上違う少女を見下ろし、口を開く。

「エル、あと十分待つて来なかつたら勝手に行くぞ」

「えっ、でも、前衛がいなければ大変なのでは？」

「大変なだけで不可能ではない」

それだけ言うと、会話を続けるつもりがないように周囲に目を戻した。少女の方も気にした風もなく、通り過ぎる人々を眺める。

五分ほど経つただろうか。町の入り口の方向から一人の青年が走つて来た。赤髪に金の目、がっしりとした体型の竜人である。

「悪い。待つただろう？」

「ああ。一時間ほどな」

金髪の青年は不機嫌さを隠しもせず返す。

「色々あつてな……話は後だ。とりあえず、来てくれないか？」

散々待たせておいてそれは何だ、と眉をひそめるが、少女が間に  
入った。

「ヘル、行きませんか？言い合いをしても仕方ありませんし」

「……わかった」

渋々頷き、赤髪の青年の後に続いた。

赤髪の青年     ディラクの説明はこうだった。

元々ディラクと金髪の青年     サディヘルと少女     シエリエル  
を含めた数人であるクエストを受ける予定だったのだ。しかし、  
紹介する予定だった一人がダダをこねた。曰く、「妖精なんかとパ  
ーティを組めるか」との事。

「妖精は弱いつてイメージがありますからねえ」

シエリエルがのんびりと言う。確かに妖精の物理攻撃力、物理防  
御力は無に等しい。装備品でもカバーしきれないほどだ。その上、

レベルやスキルが上がりにくいという欠点もあった。最初は興味本位で選んだプレーヤーも、すぐに変えてしまったほど酷かった。

その妖精を極めたのがサディヘルとシエリエルである。

「そいつの名前は？」

「アクセル。俺の幼馴染みだが、かなりの戦闘狂だ。強い奴にしか興味がなくて、弱い奴はクズだと思っている……と言ったらわかりやすいか」

ディラクは困ったように笑った。苦労しているに違いない。

「へえ……戦闘のタイプは？」

「刀を使う。前衛だな。種族は魔族だが」

「魔族の前衛、ねえ」

魔族は黒魔術に特化した種族だ。弱いと言われている妖精を選んだサディヘル達と言える事ではないが、わざわざ前衛を選ぶとは変わった人物である。

「単に外見は魔族が良かった、武器は刀が良かったというだけの本人の趣味だ」

「まー何でもいいか。そいつは余程死にたいらしいからな」

「ヘル、ほどほどにしませんと」

「わかってる。魔術がいかにか重要かわかっていない阿呆が目覚ます程度にしておくさ」

つまり、相手次第では殺すかもしれない、と。

「妖精は極めれば魔術チートだから」

何度かパーティーを組んだ事があるディラクが言った。極めるのが大変なのだが、極めさえすればこれほど良い種族はいない。サディヘルはそう思っている。

確かに、妖精は物理攻撃力が低い。レベルが100の状態で伝説級の装備をしても竜人のレベル10と変わらないのだ。おまけに、物理防御力は紙。同じく伝説級装備で同レベルの竜人に一撃でやられるだろう。素早さもないし、HP自体も少ない。

しかし、その代わりにMPと術攻撃力、術防御力はダントツで多い。詠唱に多少時間がかかるのが弱点だが、同レベルの竜人くらいなら一撃で倒せる。他の種族でも二、三発打てば十分だ。それに、物理防御力や素早さくらいなら魔術で補える。さすがに物理攻撃力は、魔術で上げたところで武器を使えなければ意味がないのだが。

実際に妖精が最弱だったとしても、サディヘルはそれで見下すようなクスが大嫌いだった。シェリエルは困ったような顔をしながらも、兄の性格は良く知っているので止める事はない。

これで変わればいいんだがなあ、と一番被害をこうむっているであろうディラクがつぶやいた。

閑話01 妖精は強い？弱い？（1）（後書き）

ストックが切れました。

諸事情によりしばらくパソコンを触れません。

携帯で頑張ってはみますが、来週の更新はできるところかわかりませんので、あらかじめご了承ください。



閑話02 妖精は強い？弱い？(2) (前書き)

先週はすみませんでした。

閑話はまだ続きます。

閑話02 妖精は強い？弱い？（2）

アクセルは魔族の例に洩れず肌が黒く、背中に紺色の羽が生えていた。髪は青みがかった銀で、肩より少し長い程度だ。目の色も銀。

「お前がアクセルだな？」

サディヘルが声をかけると、アクセルは頬杖をつきながら怪訝そうに見上げてきた。ディラクが二人の間に入り、紹介する。

「アクセル、サディヘルとシエリエルだ。ヘル、エル、こいつがアクセル」

「ふうん？ディラクが言ってた妖精？」

どうやら名前もきちんと話してあったようだ。サディヘルとシエリエルはディラクを見た。

「私達はそれなりに有名だと思っていたのですが……自意識過剰だったのでしょうか」

「いや、二人共間違いなく有名だ。こいつが疎いだけだから」

ディラクが疲れたように言った。

サディヘル、シエリエルの兄妹といえばゲーム内では知らない者

はモグリだと言われるほどのプレイヤーである。サディヘルは黒い羽の黒魔術使い、シエリエルは白い羽の白魔術使いである事からそれぞれ悪魔、天使と呼ばれていて、遠くからでも目立つ金髪をプラスした“金の悪魔”“金の天使”が二つ名だ。アクセルとて聞いた事ぐらいあるはずだが……。

「まあ何でもいい。お前は妖精が弱いと思っているようだな？」

「事実弱いだ口？」

「あのなあアクセル。妖精が弱いなんて誰が決めたんだ？確かに使いにくいだが、それがイコール弱い事にはならないだろう」

「使いにくいからこそ、使いこなせた時にすごい威力を発揮するのだとデリラクは常々思っている。ただ、使いこなす前に挫折してしまっただけで。」

「そもそも、アルヴェディアの魔術は色々和不親切だった。詠唱が長い上に一度でも間違えると発動しない。サディヘルやシエリエルほどにもなると全ての呪文を暗記しているが、初心者や暗記が苦手な人には難しい。それでも魔術師がいるのは、自分の魔術を作れるという魅力のためだろうか。」

「ガチガチの装備でも並以下にしかない妖精のドコが強いつていうんだ？魔術で身体強化を施してもやっと並だって言うじゃないか」

「確かに、魔族なら術攻撃力、術防御力共に高い。物理攻撃力や防御力も妖精や翼族より高めだし、刀を使う以上強くしてあるだろう。敏捷にしたって低くはないはず。」

「妖精は妖精の戦い方がある。そもそも、ソロならともかくパーティーで行動するのに物理防御力が重要なのか？どうせ後方支援だろう」

サディヘルはキレる事なく落ち着いて話している。横で聞いているシェリエルは少しだけホツとした。戦闘禁止区域である町中でいきなり暴れられたら困るのだ。

「足手まといになるようならイラナイって事だヨ。妖精なんか流れ矢に三回当たったダケで死にそうじゃないか」

「流れ矢に三回も当たるようなへマをするわけがないだろうが」

「例えだヨ、例エ」

馬鹿じゃないか、というような目でサディヘルを見上げる。サディヘルのこめかみがわずかに動いた。

「大体、後衛に攻撃がいかないようにするのが壁役の仕事だろう？」

「万が一もあるだろうが」

「やる前から万が一を考えてどうする。第一、オレもメインで使わないだけで白魔術は一通り使える。どちらかが負傷しても、死んでもそれほど問題にはならない」

聞きながら、シェリエルはあれ、と思った。自分と同じく一步下がった位置にいるディラクをつつく。

「ん？どうした？」

「アクセルさんって戦闘狂でしたよね？」

「万が一、なんて言葉を使っている辺り違和感がある。ディラクはシエリエルの言いたい事がわかったようで、ああ、と言った。」

「あいつは戦闘になると人が変わるんだ。普段は少々頭が固いだけでわりと常識人なんだが」

「なるほど」

それにしても、とシエリエルは思う。

サディヘルは面倒臭がりで始終だるそうにしている人だ。まあ、ゲームは好きだし戦闘狂の気はあるが、大抵の事には消極的で眠そうなのが標準装備である。口数もそれほど多くない。しかし、アクセルと口論しているサディヘルは饒舌で目も開いている。猫背も直り、ハキハキしているので好青年にしか見えない。シエリエルはアクセルなら兄の良い友達になるのではないかな、と思った。

「わかつた。そこまで言うなら試してやるうじゃないか。このメンバ―で依頼を受けろ。足手まといじゃないと証明してみせな」

「のぞむところだ。元々前衛なしでやってるんだから、そう簡単にやられるわけがない」

クエストは好きだが他人と競う事のないサディヘルがやる気にな

っているのを見ると、アクセルとは案外気が合うのかもしれない。アクセルの方も強い敵やプレイヤーと戦うのは積極的だが、弱いと思っているプレイヤーとパーティーを組むなんて槍でも降りそうなくらい珍しい事だ。

シエリエルとディラクは顔を見合わせ、お互いに良い傾向なのではないかと目だけで語り合った。

「ところでディラクさん、他の方はいいのですか？」

「あー……、まあ、あいつがあんな調子だから無理だろうと思って断ったんだ」

「そうですね。では四人だけですね」

あまりバランスが良いとは言えないが、サディヘルと二人よりはマシだろう。

「おい、シエリエル！」

「ディラクもダ！置いて行くゾ！」

やはり似た者同士なのではないかと、苦笑する二人であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3309v/>

---

金の悪魔と金の天使

2011年12月15日23時49分発行